

独立行政法人大学入試センター
入学者選抜研究機構国際セミナー報告書

大学入学者選抜

～進学、機会の平等、そして質保証～

平成 23 年（2011 年）2 月

独立行政法人大学入試センター入学者選抜研究機構

独立行政法人大学入試センター
入学者選抜研究機構国際セミナー報告書

College Admissions” International Senior Seminar

大学入学者選抜
～進学、機会の平等、そして質保証～

入学者選抜研究機構「入試評価部門」

大学入試の多様化が進むなかで入試の機能不全が指摘されています。入試に必要とされる選抜機能、診断機能はどのように働いているのか、またどのようなべきなのか、大学入試スタンダード(標準)についての統計学的・理論的な研究を行います。また同時に、大学システム全体の変化をも視野にいれながら、外国の事例等を参照し、入試の質的な評価基準の設定及び入学者選抜の制度についても調査と研究を進めます。

第6プロジェクト:

諸外国の入試制度の調査と評価

高等教育の拡大により、入試だけにとらわれない、新しい進学方式を視野に入れた、新たな接続のシステムが模索されています。そこで諸外国における高等教育システムの全体と各教育サブシステムの中身(入学・進学等)について、調査・分析を進めます。

具体的には、北米、EU 諸国、アジア、オセアニアにおけるアドミッション・ポリシーに着目し、高大教育接続における入学者選抜制度の健全性、有効性を調査、評価し、比較国際アプローチによる政策研究を行います。

客員教授 田中 義郎
特任助教 當山 明華

(第6プロジェクト連絡先 TEL:03-5478-1355 E-mail:toyama@rd.dnc.ac.jp)

～ 目 次 ～

セミナーの趣旨 -----	1
講演者ご紹介・進行説明 -----	5
講演 1 “SAT War and Public University Admission in the US”	
「SAT ウォーズとアメリカの公立大学」	
カリフォルニア大学バークレー校 John Aubrey Douglass 教授 -----	7
資料 -----	1 7
講演 2 “College Admission in Taiwan – Access, Equity, Quality”	
「台湾の大学入学者選抜—進学機会と質保証」	
台湾国立中正大学 Sheng Yao Cheng (鄭勝耀)准教授 -----	2 1
資料 -----	3 1
報告 3 “An Current Issue of College Admissions in Japan”	
「入学者選抜の課題 —多様化の中での質的保証—」	
大学入試センター試験・研究副統括官 荒井 克弘教授 -----	3 7
資料 -----	4 7
指定討論	
イースト・ウエストセンター・グローバルゼーション研究センター所長	
Deane Neubauer 教授 -----	5 1

～ 登壇者紹介 ～

●荒井 克弘

独立行政法人大学入試センター 試験・研究副統括官
入学者選抜研究機構長

●John Aubrey Douglass

カリフォルニア大学バークレイ校 高等教育研究センター 上級研究員

●Sheng Yao Cheng (鄭勝輝)

台湾国立中正大学 教育学部 准教授

●Deane Neubauer

イースト・ウエストセンター・グローバル化研究センター所長
ハワイ大学併任教授 (元ハワイ大学学長代理)

●田中 義郎

独立行政法人大学入試センター 入学者選抜研究機構客員教授
桜美林大学教授

大学入試センター入学者選抜研究機構国際セミナー プログラム

“College Admissions” International Senior Seminar”
大学入学者選抜 ～進学、機会の平等、そして質保証～

日時 2009年11月13日(金)

会場 大学入試センター2階大会議室

- 12:30～ 受付
- 13:00～13:15 開会 (司会) 大学入試センター入学者選抜研究機構客員教授
田中 義郎
- 13:15～14:15 “SAT War and Public University Admissions in the US”
「SAT ウォーズとアメリカの公立大学」
カリフォルニア大学バークレイ校教授
John Aubrey Douglass
- 14:15～15:15 “College Admission in Taiwan – Access, Equity, Quality”
「台湾の大学入学者選抜—進学機会と質保証」
台湾国立中正大学准教授
Sheng Yao Cheng (鄭勝耀)
- 15:15～15:35 休憩
- 15:35～16:30 “An Current Issue of College Admissions in Japan”
「入学者選抜の課題 —多様化の中での質的保証—」
大学入試センター試験・研究副統括官
荒井 克弘
- 16:30～17:00 指定討論
イースト・ウエストセンター：グローバルバージョン研究センター所長
Deane Neubauer
- 17:00～17:30 討論

逐次通訳 (冠木友紀子氏)

セミナーの趣旨

荒井 克弘

(大学入試センター入学者選抜研究機構長)

それでは、定刻になりましたので、これから大学入試センターのインターナショナルシニアセミナーを始めさせていただきます。

私のほうのちょっとタイムスケジュールのミスがありまして、若干おくられている方もおられると思います。失礼いたしました。お忙しい中、今回のセミナーのためにお集まりをいただきましてありがとうございます。

私は、大学入試センター入学者選抜共同機構準備室長の荒井と申します。

今回のセミナーの趣旨を若干述べさせていただきますと思いますが、その趣旨に関連いたしまして、大学入試センターの研究組織、特に今申し上げました共同研究機構というのが、どういう位置づけであるのかということをご紹介させていただきたいと思います。

入試センターの教員系の副所長からの図になっておりますけれども、この上に理事長がおられます。この試験・研究統括官、教員系の副所長のもとに、研究開発部と、それから現在その計画を進めております入学者選抜共同研究機構という、2つの研究組織が設けられることとなります。既に研究開発部については、センターの発足以来、その組織がございますけれども、来年の4月に発足予定でございますのが、この入学者選抜共同研究機構というものでございます。

その位置づけでございますけれども、研究開発部というのがコンベンショナルなものとしてございますけれども、共同研究機構のほうは、より外に向けてと申しますか、あるいは内と外との連携というものを強く意識しまして、研究開発部との連携はもちろんでございますけれども、外の社会との、あるいは大学等の外部の組織との連携をとっていくということで、情報発信力、研究発信力を高めていこうということの趣旨でございます。とりあえず、来年4月から始まります新しいフェーズでは、障害支援の部門、それから新しい試験の開発を研究する部門、それから入試評価、カレッジ・アドミッションの評価そのものを扱おうという、その3つの部門が計画の俎上になっております。ほぼその陣容も固まりまして、来年の4月に向けて準備を進めているというところでございます。

今回のこのシニアセミナーというふうに銘打った国際会議でございますけれども、研究機構の発足前でございますので、第1回というふうには言いにくくて、第0回ということになりますけれども、ゼロからスタートして、この新たな共同研究機構の役割を着実に果たしていくということで開催をさせていただきました。特に今回のセミナーの企画に当たりましては、機構の客員教授に就任いただいている、隣にいる田中教授との相談をしながら進めてきたわけでございますけれども、一方的なシンポジウムということではなくて、このセミナーを開催する中で、何が問題であるのか、あるいは共有できる問題、あるいは

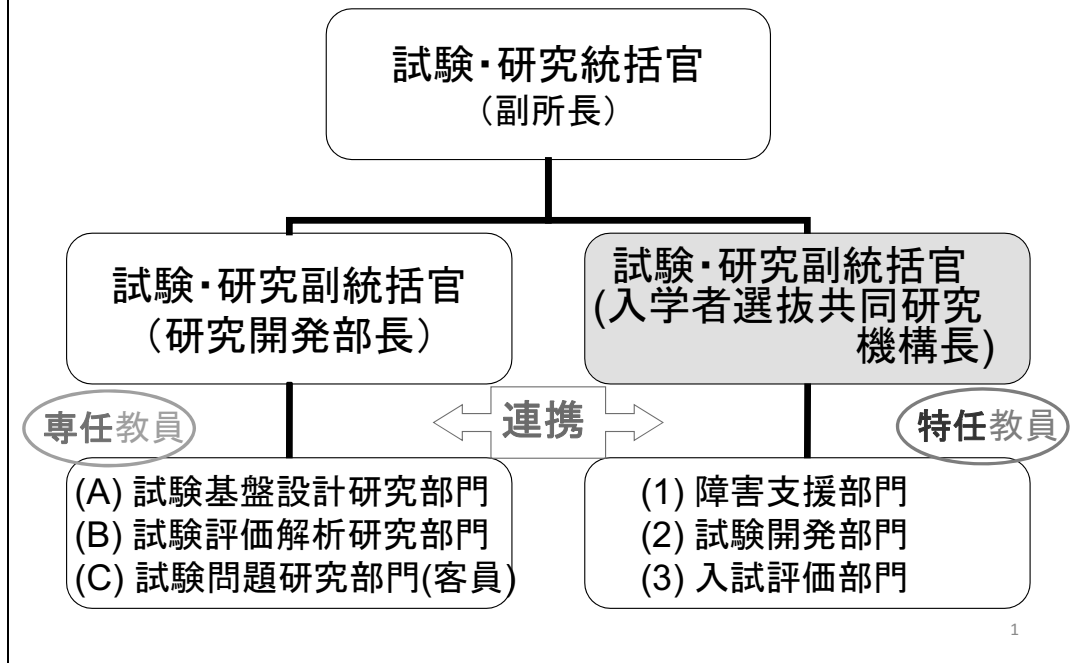
協力して解決の図れる問題は何かということを中心としていきたいというふうに考えております。

以上、簡単でございますが、私のほうからの今回のセミナーの趣旨説明を申し上げて、マイクを司会の田中先生のほうにお渡ししたいと思います。

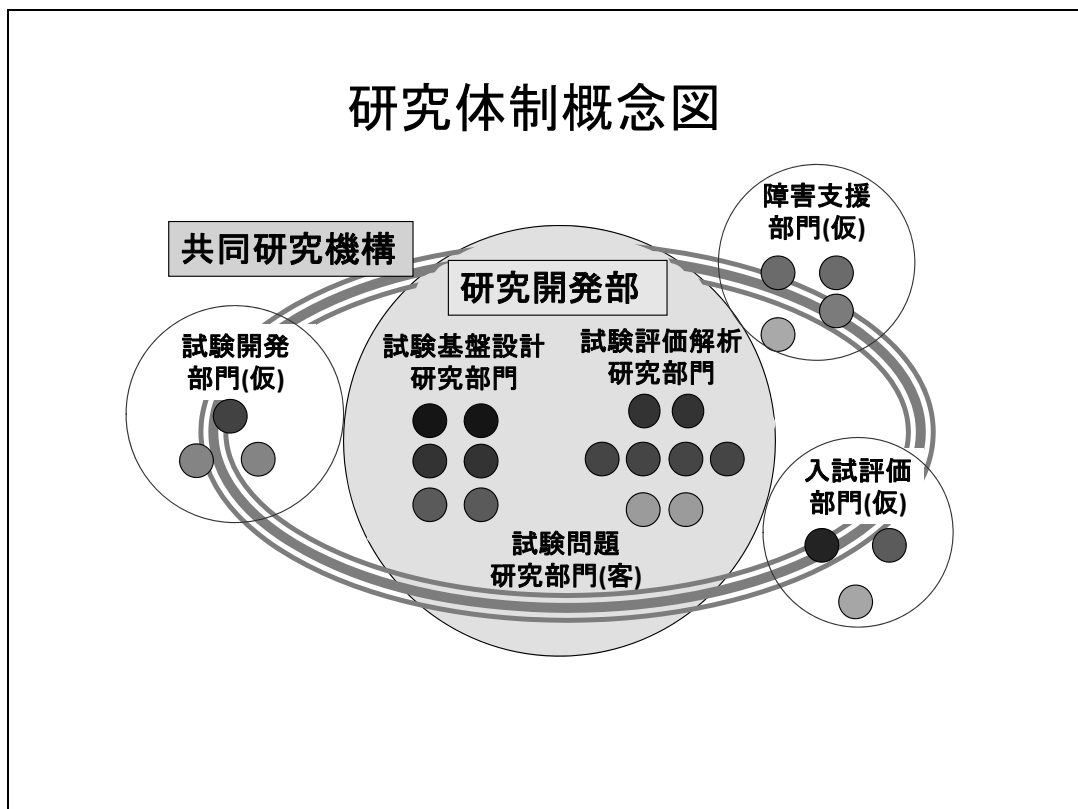
それから、肝心なことを忘れていました。今回のセミナーの開催に当たりまして、3人の研究者の方を外国からお招きをいたしました。ちょうど私の近くから、カリフォルニア大学バークレー校のジョン・ダグラス先生、それから、台湾中正大学のシェン・チェン先生、それからイースト・ウエストセンターのグローバリゼーション研究センターの所長で、なおかつハワイ大学の教授であられるディーン・ヌーバウアー先生、この3人の先生方にご協力を賜りました。

では、マイクをお渡ししたいと思います。

センターの研究体制(計画案)



研究体制概念図



講演者ご紹介・進行説明

田中 義郎

(大学入試センター入学者選抜研究機構客員教授・桜美林大学教授)

田中でございます。きょうは司会をとということでございますので、司会の任を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

改めまして、本日のゲストのスピーカーの方々、それからディスカッサントの先生を、ご紹介をさせていただきたいと思います。

今、荒井先生よりご紹介がありましたけれども、一番私のほうから右手になります、ジョン・ダグラス先生でございます。ジョン・ダグラス先生は、現在はUCバークレー、カリフォルニア大学のバークレー校の高等教育研究所の上級研究員をされておられます。

日本の方々には、カリフォルニア大学バークレー校の高等教育研究所というと、どう説明をしたら一番いいかと考えてみたんですが、まずは、創立に当たってクラーク・カーがかかわった由緒ある研究所でございまして、日本の高等教育の先生方には、マーチン・トロローが在籍をしたとか、そういったことでもってよく知られている研究所だというふうにご理解をいただければと思います。

ダグラス先生は、このバークレーの高等教育研究所に来られる前は、カリフォルニアシステム全体の首席政策分析官と、それからカリフォルニア大学のサンタバーバラ校での教歴、あるいは研究歴を経て、現在の役職についておられます。全米その他、ダグラス先生のご業績は、このほかにたくさんあるかと思いますが、よく知られておりますのは、カリフォルニアのマスタープランの研究ということでご著書を出されておられまして、きょうのお話も少しはそういったところ、もっと現代的なお話だとは思いますが、そんなお話を聞かせていただけるのではないかと楽しみにしております。

お話だけではなくて、今日、こういう立場でもって荒井先生と今回のセミナーを企画するときに、こんなことを考えました。どうもこれまで日本では、国際会議というと外国からおいでいただいてご意見を拝聴するだけで、紹介をしていただくというので終わってしまうことが多い。そうではなくて、もうそろそろきちんと議論をしましょうと。そして、お互いに分かち合えるところ、あるいは、どこが違っているのかといったようなことでの議論ができればというふうに思っているわけでございます。

ヌーバウアー先生と、この方を後ほどご紹介しますが、どうもこれまで高等教育の世界でも、民族とか国がどれほど異なった制度だとかシステムを持っていて、能力がどれくらい違っているのかというところに注目してきた観があるわけですが、今のグローバル化の流れの中では、私たちが直面しているものということで考えますと、民族がいかに異なるかではなくて、どれほど同じ能力を有しているかというところに、一つの座標軸がだんだん動いていかなければならないところもたくさんあるのではないかと

たようなことを踏まえて、こういったセミナーの企画をさせていただいたわけでございます。

次に、台湾の中正大学のケント・シェン・チェン先生でございますけれども、彼は台湾を代表する若手の研究者でございます、UCLAでドクターを取られました。

今、台湾は、大学進学率が日本よりもはるかに先を行っています。進学率のパーセントだけで考えましたら、最近100%の大学進学です。そのあたりのところがどういう意味を持っているのかというお話を伺えるかとは思いますが、ただ、質評価の問題にしましては非常に厳格な質評価をやっておりまして、第三者評価機関は1つでございます。その第三者評価機関が毎年評価をするのですが、プログラム評価をやっておりまして、私の聞いたところによりますと10%程度、各大学の中での学科単位でもって、これはもう十分なクオリティーが得られないから閉めなさいという勧告が出されているという、そういう状況にあるというふうに伺っております。

その意味では、近い国でもありますけれども、私どもと共有できる部分、あるいはどこが異なるかといったことについてのご見識を少しお話をいただければ、いいディスカッションのきっかけになるのではないかと、こういうふうに存じております。

それから、3番目のスピーカーは、私がもうご紹介申し上げるまでもございません。私の左に座っていらっしゃる荒井先生でございます。きっと、今日は日本のカレッジ・アドミッションのエッセンスとは何かということについての、今まで聞いたことのないようなお話が聞けるのではないかと、非常に楽しみにしているところでございます。

それから、最後にディーン・ヌーバウアー先生をご紹介させていただきます。

きょうはディスカッサントということでもって、恐らく彼にまさるディスカッサントはいないというふうに私は確信をしておりますけれども、ヌーバウアー先生は、今現在、イースト・ウエストセンターのグローバリゼーションリサーチセンターの所長をされておられますけれども、ハワイ大学のソーシャルサイエンス、社会科学の学部ができたときの創設の学部長でいらっしゃいますし、その後、ハワイ大学の学長代理等々をお務めになられて、同時に、西部地区の大学基準協会の評価にかかわる専門職としてのご経歴も長年ございます。まさに大学の入学のところ、それから出口のところ、大学の中身のところ、そういう意味では非常に多岐にわたってよくご存じの方でいらっしゃいますし、その意味では、全体のリサーチといいますか、研究の枠組みを踏まえて、適切な課題に向かつての議論のナビゲーターをお務めいただけるというふうにして確信をしているところでございます。

きょうは、そういった趣旨での会でもございますので、できる限り多くの課題が抽出され、次のディスカッションに向けて有意義な討論がされますことを、司会としては何とかそのご協力をさせていただきたい、こういうふうに思っているところでございます。

余り話をしますと、せっかくの時間が短くなってしまいますので、私のご紹介はこの程度にさせていただきます、実際のご報告をお願いさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いをいたします。

講演1 “SAT Wars and Public University Admission in the US”

「SAT ウォーズとアメリカの公立大学」

John Aubrey Douglass

(カリフォルニア大学バークレー校 高等教育研究センター 上級研究員)

ありがとうございます。田中先生、荒井先生、今回お招きくださりまして、とても温かいお話、とてもうれしく思っています。

また、お招きくださったことを理事長の吉本先生にもお礼を申し上げなければなりません。

荒井先生と田中先生にお会いしたのは、1年前でした。ちょうど大統領選のときでした。私たちはすばらしい時間を過ごしました。私たちが進む方向はどこでも、オバマ大統領がやろうとすることでもあります。

まず、アメリカの高等教育にはどんな種類があるのかお話ししたいと思います。アメリカのある高等教育機関の中で、シビアな選抜、入試と言えるのは10%です。そして30%が、まあまあ厳しいという感じ。ほとんどの大学は、それほど選抜が厳しくないといいますが、だれでも入れます。コミュニティーカレッジがそういう感じですか。それから、大事なことなんですけれども、高等教育機関に入学する人の8割が公立の機関に入学しています。これからアメリカの私立、公立を含めて高等教育機関の入学の段取りについてお話ししますが、私が話をするのは、この一番最初の8%から10%に当てはまる機関のことです。

その入学選抜の目的は何かということをお話しますが、変数はここに挙げた4つ以外にもいろいろありますが、とりあえず4つについてお話しします。

高等教育機関に入学できるということは、実に多くの人にとって報賞、報い、ご褒美のようにとらえられています。特にテストの結果、テストの点数が高い子については特にそうですね。

また、入試する側にとっては、その学校に入る学生の数を調節するという働きもあります。

3つ目は、カリフォルニア大学に当てはまることなんですけれども、入試を行う目的の一つに、州あるいは国の人口構成を反映するという働きもあります。これは特に選抜が厳しい大学に当てはまることなんですけれども、大学が入試で要求することが高校でのカリキュラムに大きな影響を与えるという点もあります。例えば、カリフォルニア州、それからミシガン州もそうですけれども、公立大学、これはランドグラント、土地を与えられた、校地を与えられた大学なんですけれども、こういう大学は、1950年代などは、高等学校を認証評価する役目も担っていました。

それからもう一つ、主に入学前に相当するのですけれども、大学のアドミッション・ポ

リシーが高校生の生徒としての振る舞いを形づくるといふ働きもありました。それから、主要な大学では、入試を経た後、学生になった後、どのようにアカデミックに学究的な成功をおさめるか、どのような振る舞いをとるかということも形づくってきました。

カリフォルニア大学では、1868年の創立当時から、アドミッション・ポリシー、入試ポリシーが、その後のアカデミックな成功を予期できるものであるべきだという考えが元々ありました。アカデミックな成功というのは、教室でうまく、きちんと学べるということであらわしています。

もちろん、カリフォルニア大学だけでなく、ほかの公立大学、それから私立のカレッジも含めて、アドミッションのプロセスが学外での生徒の振る舞いをもある程度規定・形成するものであるべきだという考えもあります。教室外での振る舞いもですね。だから、生徒会、自治会に参加しているか、地元でボランティアをしているか、講義に喜んで参加しているかというふうに、主要な研究大学で学生に提供される機会を生かせるかということも形成するわけです。

カリフォルニア大学などを始め、さまざまな大学で大変重要視されている変数の一つに、この大学に来ることで得るものが最も多い学生はだれだろうという視点です。カリフォルニア大学での一例ですけれども、収入が低く社会的には不利な背景を持った学生たちが、実は一市民としても、そして学生としても、実に熱心に取り組む、活躍するという例が見られます。となると、ここで我々がみずから問う問いは、このような生徒をより多く入学させられるような構造に入試をするべきなのかどうかということです。

さて、このように入試にはさまざまな価値ですとか、形成できる物事があるのですが、こうしたことをとらえた上で、アメリカではこのような問いがあります。標準化されたテストは、私たちがそのような目的にかなう入試、アドミッション・ポリシーを持つのにどう役立つのだろうか。もちろん、この答えを私が知っているわけじゃありませんし、誰もわからないですけれども、どの大学も、あるいは入試サービスにかかわるどんな人たちも、このことは考えなくてはならないことです。

ここで、少なくともアメリカでは経験的にはっきりしていることを幾つか、入試をつくる上で考えなくてはいけないことを2つ、3つ申します。特に選抜の激しい機関においては、最高の公益を分配する役目を果たすものです。そして、それは国あるいは州での社会経済的な可動性ですとか、経済の発達にかかわる問題を含むものであるということです。このように大いに事を左右する要素を含んでいるのですけれども、こういうふうに言えましょうか、政治的な決断でもあると。つまり、だれが、どこで、いつ、何を得られるのか、そして、だれがそれを自分で得ることを決断するのかを考えなくてはなりません。

もし、このところにご興味おありの方は、私、1冊、本を書いています。英語で言うところ「Political process of admission policy at public university」、つまり「公立大学でのアドミッション・ポリシーにおける政治的プロセス」という本を書いていますので、ご覧ください。

ということは、アドミッション・ポリシーを設定するというのは、常に理性的に説明のつく意思決定ではないのです。ですから、そのことを、決していつも理性で説明がつかものではないということを、私がUCのことをお話しするとき、あるいは、どのアメリカ人がアメリカの高等機関について話をするときでも、心にとめておいてください。

では、これからUCはアドミッション・ポリシーをどういうふうに行っているかお話ししますが、毎年変わるものですから、ついていこうと頑張っています。

ご存じだと思いますけれども、カリフォルニアでは高等教育機関といっても3部門、3種類ございます。カリフォルニア大学は州全体の高校卒業生の8%を受け入れます。黄色いところがカリフォルニア州立大学で、こちらには19%の卒業生が進学します。黄緑のところが2年制のコミュニティーカレッジで、カリフォルニアの高校卒業生の73%が進みます。カリフォルニアほどたくさんの生徒がコミュニティカレッジに進む州はほかにありません。いいことだとは思わないんですけどね。それと別問題で、コミュニティカレッジは門戸をだれにでも開いているような状態です。州立大学はまあまあ選抜あり。全高校のトップ33.3%にランクされる生徒であれば、だれでも入れます。カリフォルニア大学(UC)へ来られる生徒はというと、トップ12.5%以内の高校卒業生です。というわけで、カリフォルニア大学は全米の中でも最も競争の厳しい高等教育機関の一つとなっているわけです。

UCにはキャンパスが10もあって、でも、そのうち1つは医学校ですから、学部生を受け入れるキャンパスは9つです。

カリフォルニアだけではなく、アメリカの全州で特徴的なことは、コミュニティカレッジからトランスファー、転学、編入学する学生がいるということです。だれでも入れる2年制のコミュニティーカレッジでよいGPAをおさめれば、カリフォルニア大学の学部、4年のうちの3年生として編入することができます。

まず私は、フレッシュマン、1年生の学生たちについてお話ししようと思うのですが、カリフォルニア大学の社会的な契約とは一体何でしょう。

もう既にお話しした項目もあるんですけども、一つには、アドミッション・ポリシーは高校のカリキュラムと生徒たちの行動を規定するものであってほしいと思います。このようにUCが影響を与えることが、仮にその生徒がUCに進学しなかったとしても、生涯にわたってよい影響を与えるようなものであってほしいと思います。

そして、大学でのアカデミックな成功、つまり、よい成績をとれるということですが、それを予期できるようなクライテリア、範疇、基準を入試に設けたいと思っています。居住地域等の影響は少ないです。歴史を通じまして、カリフォルニア大学は100年以上にもわたってアセスメントを続けてきまして、トップ12.5%に入るような高校生であれば、さっき言いました2つの基準を満たせるだろうという数値をはじき出しました。1960年代以前は15%だったんですけども、当時、60年代に調査され直しまして、12.5%になりました。

それから、一般的なポリシー、方針としまして、UC、カリフォルニア大学適格者とい

う考えがあります。UCのいずれか一つのキャンパスには適格であるということですが、その適格性については後ほどまた申します。

それから、先ほども申しましたけれども、このアドミッション・ポリシーは包括的なものであってほしいと思います。というのは、つまり、カリフォルニアの人口構成ですとか地理的構成を反映するような入試でありたいと思っています。この包括、インクルーシブが何を意味するのかというのは、時代とともに変わることなんですけれども、例えば地理的条件ですとか、それから、社会的・経済的な地位、それから人種や民族的背景を含むようになりました。時とともに、これらすべてを含むように変わってきています。

UC適格者というのはどういうことかということ、高校の成績と、必要とされる講座、授業をとっているということと、テストのスコアがよいことです。いよいよ選抜の段階に入ります。キャンパスは、それぞれに自分たちの基準を持っていて、それをコンプリヘンシブとか、ほかの大学だとホーリスティックなんていう言葉を使うこともあります。要するに総合レビューというものを行います。この学生をどこから選ぶかということ、UC適格者のプールといいます、この集団の中から、それぞれのキャンパスで選ぶのです。

日本でも、この適格者の考え方、これは日本の大学にも影響を与えている、日本でも同じことをしているのではないかと思います。

それからもう一つ、公立大学ではこのこと、いや、別にアメリカの私立の大学とこのことを共有する必要はないのですけれども、どうしたらこの大学に入るのに適格とみなされるのか、その条件が透明ですっきりしていること、比較的クリアで透明であることが必要だと思います。

というわけで、適格とみなすには2つの部分から構成されます。一つはカリフォルニア大学機構への適格性の部分と、それから、適格であるということが認められた後、それぞれのキャンパスに選抜されていくという部分です。

余りここでややこしくしたくないんですけれども、これがUCの適格指数です。これは、あるスライド尺度の一つでありまして、AからGのコースと呼ばれる一連の科目群があります。例えば英語——つまり国語——とか歴史とか数学などでして、GPAというのは評定平均のことです。4点満点で、4段階ではなかった、A、B、C、Dで、Fがつくと0点ですから、これは何ももらえないんですけれども、GPAがよければよいほどテストでとらなくてはいけないスコアは少なくて済みます。この指数は大変GPAに重みづけをされた見方なのですが、なぜかという、歴史を通じてGPAは学生の成功を予測する最も信頼に足る指数だ、数字だということがわかっているからです。外国から来る学生、あるいはカリフォルニア以外から来る学生は、GPAもテストの点も、ずっと高い数値が求められます。

カリフォルニア大学では、テストのスコアがどれだけよい予測の道具になっているかを調べるためのさまざまな調査がありまして、こんがらがっていて、毎年変わっているのですけれども、まずはこの2つ、SAT、それから科目テストを行います。

ところが、もうさかのぼることはるか昔、1920年代の調査で、既にG P Aが学生のアカデミックな成功をはかるのに、予測するに一番よいということがわかっているのです。別にカリフォルニア大学だけでなく、国レベルの調査でも、科目テストのほうが適性テストよりも、とてもとは言わないけれども、ましだということがわかっています。とにかく、この適性テストと科目テストを、2つ混ぜたらまだ良いということもわかっています。

おもしろいことは、競争の、選抜の厳しい機関では、どれが一番いい予測のきく道具なんだろうと考えてみますと、どれもそれほど良くはないというのが事実なんです。というのも、UCのようなところでは、さまざまに違う才能を備えた、自分で自分を選抜したような学生たちが集まってきますので、入るときはテストの点が低くても、実は大変優秀な結果をおさめていく学生がいます。

さて、一旦UC適格となったら、次は選抜のプロセスです。ここに挙げたのはUCの基準ですけれども、似たようなものは大体どの公立大学でも、あるいは選抜の厳しいところならば私立の大学でも持っています。

まず1項目めが、必要科目以上に、それを超えてどのくらい学んでいるか。例えばバークレーですと、願書を見まして、どんな授業・講座をとっているか、あるいは飛び級のような上級講座をとっているか。例えばカレッジの、大学の単位がもらえるような授業を高校段階でとっているかどうかなどです。

もう一つ、私たちが持っている価値観としては、これは歴史の中で名前が変わってきているのですけれども、居住地域の中での適格さです。

例えば、高校でトップ4%に入っている生徒ならば、バークレーのようなところに来られることになります。もちろん、そういう人たちも最低のテストの点はとってもらわなくちゃいけないのですけれども、もうこういう層になると、テストの点はそれほど大きなことじゃないんです。だから、この仕組みによって、貧困地区にある学校とか郊外の学校から、さまざまな学生が来られるようにしているのです。こういう学生たちは、UCでも立派にやるんです。私たちは、学生をトラッキングして、できばえを追いかけます。

それから、生徒を取り巻く環境が変わった点はないか、普通でない点はないかということも考えます。例えば、片親のおうちに育ったとか、犯罪率のとても高い地域に育ったのに、この子はよくやっているという場合もあります。

それから、地元共同体でのサービスプログラムにどれだけ貢献しているかということですね。これがカリフォルニアの高校生たちのボランティア活動を大いに勢いづけることになりました。

それから、特別な才能をもっていることです。数学はそれほどできないけれども音楽の才能がすばらしいだとか、それから、数学、スポーツなどへの特別なかわり、取り組みですとか、卓越したできばえなどです。

では、これから2つの要因、収入と民族的背景という2つの要因をもとに、どのような学生がUCに入っているかをお目にかけています。

これが、私たちがアドミッション・ポリシーを経て得た結果ですけれども、ちょっと見にくいですけれども、こちらの縦軸にある0から50までの数字が貧困な家庭に育った生徒の率をあらわします。これがバークレーですけれども、バークレーをごらんいただきますと、32%から33%の学生が貧困家庭出身ということになります。この丸の大きさが学生の人数をあらわしまして、これはカリフォルニア大学での調査ですが、細かに調べた人がいまして、それでわかったことは、バークレーはアイビー・リーグを全部合わせたよりも多くの貧困家庭出身の学生を入学させているということです。

私のキャンパスの学長は、この数字が大のお気に入りです。宣伝にちょうどいいということで、この話を彼はたびたびしています。でも、アイビー・リーグ全部合わせたよりも貧困層の学生が多いというのは、ロサンゼルスでもデービスでも同じことです。

さっきの数字を全部通してお話ししてもいいのですが、もう一つお目かけますと、今度は低収入層、高収入層出身の学生のGPAを比べまして、親の収入が学生のできばえに何か関連があるのかどうか調べました。

ペル奨学金というのがありますが、これは連邦政府から出される奨学金のことで、これを受けているということは貧困層という意味です。それから、年収を12万5,000ドル以上、以下というふうに、この後は年収で分けていきました。この第一世代とここに書いてありますのは、その家の中で大学へ入学したのは自分が最初だという学生を第一世代と言います。第二世代以上とこちらにあります。これは、親が大学卒業者の場合です。これは非常に大事な変数だと思っていまして、教育資本というふうになづけています。確かに違いはあります。GPA全体を眺めてみますと、これは1年生から4年生まで、全学年を調べたんですけれども、違いはありました。でも、それはまるで意味がないほど、とてもとても小さな違いでしかありませんでした。他の子と同じくらい、こちらの学生もうまくちゃんとやっています。このことは、私たちがアドミッション・ポリシーに含めている価値観と大いに関連があると思うのです。

というわけで、今やUCにはたくさんの低収入家庭からの、そして、その親が大学を卒業していないという家庭からの学生がいますが、そればかりでなく、UCには移民の子もたち、さまざまな人種的背景を備えた学生たちがいます。ごらんください、この中国系の方たちが第2の大きなグループをつくっています。赤いところが、アメリカに生まれたわけではないけれども今は住んでいる。黄色のところは、自分はアメリカ生まれだけれども、親のうちどっちかアメリカ生まれでない。カリフォルニア大学では、もう全学部の54%から55%の片親がアメリカ生まれではありません。

でも、UCにはまだまだいろんな問題がありまして、まだ十分に代表されていないグループもいろいろあります。そこを今日は深くお話することはできないんですけれども。

さっきも申しましたけれども、教科テストのほうが適性テストよりも、とまた言ってしまうけれども、適性テストよりもよいと。そして、大学へ入ってからのできばえを予測するには、やはり何といたっても高校でのGPAが一番いい予測ツールであると。それ

をアドミッション・ポリシーに反映すべきであると考えています。そして、アドミッション・ポリシーに含められている集団は、あるいは除外されている集団はないだろうか。それから、選抜の厳しい機関におけるアドミッション・ポリシーが、学校あるいは学生の行動、振る舞いを規定している、形成しているということを、どれくらい意識できているか。私たち皆、高等教育の研究調査にかかわる者は、調査をし、どのようにしたらよりよいアドミッション・ポリシーをもって、あるいはどのような変数をもって取り組めるのか、調査をし、考え続けなければいけないはずです。

それから、最後の1枚は、皆さんがご存じのことばかりですけれども、日本の状況を考えますと、人口が減っている、それから入学を見込める生徒の数も減る、それから高等教育機関の再編成が行われつつある、それから、外国人、日本人でない生徒を30万人、留学生を入れようとしていると。

そして、また繰り返しになりますが、さらにもう一度強調しておきたいのは、選抜の厳しい機関におけるアドミッション・ポリシーが、いかに学校や生徒たちに影響を与えるのか、その力にかんがみて、どのような変数を持てば、生徒たち、高校生たちがもっと夢中になって取り組み、主体的に進学するようになるか、そのことを考え続けたいと思います。

ありがとうございます。(拍手)

ちょっとここで話し合いができるんでしょうかね。

コメントと回答

田中教授（司会）

先ほど私がディスカッションをと言ったものですから、多分10分残してくれたのだと思いますが、どうでしょう、コメント等、ぜひこの機会に。いい議論のきっかけになればと思いますが、いかがでございましょうか。

質問者

GPAのことですけれども、高校によって随分格差があると思うんですね。その問題をどうクリアしておられるのかということと、1つだけにしておきましょうか。

ダグラス教授

おっしゃるとおりなんですよ。グレードインフレーション、点数インフレということが起きてきて、もちろん問題はあるんです。それをクリアするために、あの指数を変え続けてきていまして、いい点を取りやすい学校もあれば、そうでない学校もあるわけですけれども、このリサーチを試してみたら、調査してみたらわかったんですけれども、常にトップ4%くらいの学生に照準を当てれば、グレードインフレーションが起きていても、大学できちんとしたできばえを示せる学生が得られるということです。

質問者

それは、トップの子どもたちのセレクションにはいいけれども、そうではないの子どもたちのセレクションには余りGPAはよくないと思うんです。そういうことでしょうか。

ダグラス教授

そうですね、今お話ししていたのは、本

当に選抜の厳しい機関でのことでしたので。それは、それほどGPAのスコアのよくない子の場合とか、グレードインフレーションが起きていない学校の場合とか、いろいろ考える項目はありますけれども、今ここでお話ししたのは、特に選抜の段階においては、何か特別な才能がある子なのかどうか、あるいは特別な外的状況の問題を克服してきたかどうか、あるいは頑張りとか達成が特記すべきところがあるかどうか、そういう要素を見ていました。

質問者

UCのアドミッション・ポリシーも毎年変わって大変だと言っていましたけれども、そんなに毎年変えると受験生が大変じゃないんですか。

ダグラス教授

毎年というつもりではなくて、別に毎年やっているわけではなくて、再評価を受けなきゃいけない機関もありますし、あるいは政治的な重圧が増すときもあるんですね。例えばこういう学生をとらなきゃいけないなんていうプレッシャーがあります。でも、大学のアドミッション・ポリシーとしては一貫性のある、継続性の、まとまりのあるものだと考えています。

しかし、政治的な重圧といいますと、例えば95年、積極的是正措置を導入せよということが決まりまして、あるマイノリティーグループの学生を入れなさいということになったんですが、評議員会の中では、それをぜひひと言人たちもいれば、その措置をするべきだと言人たちと、そうでないと言人たちはいたんですけれども、

その評議員の一人にコノリーという人がいまして、この人が積極的是正措置に反対で、アドミッション・ポリシーに入れるというのは止めになったんですけれども、もう大議論になったんです。

アドミッション・ポリシーの変化というのは、漸次的、少しずつである、だんだんとであるべきだと思います。学生も、その家族も、大学へ入ろうと一生懸命、常に努めているんですから、急に突然、ゲームの性質そのものを変えてしまうようなルール変更をしますと、低収入層ですとか、あまり不利な状況にいる人たちには大混乱です。

それから、最後に加えますが、さっき言わなかったことなんですけれども、アドミッション・ポリシーが経済的な援助措置とどう関連づけられているかも大事なことです。特に低収入層だけではなくて、中くらいの収入の人たちにとっても大事です。

質問者

先生、8%から10%のところについて、きょうお話しされるという限定されましたですね。それで私はディスアビリティーズの入試のこれからを考えているわけなんですけれども、ディスアビリティーズについて教えてください。

ダグラス教授

どの大学でも、そのことは考えています。例えばディスアビリティー、障害のある方にどのような特別なサービスをしたらいいかということは考えて提供しています。それから、低収入層とか、個人的な状況を克服して才能のある学生たちが入れるように、アドミッション・ポリシーに含めてもいます。

大事なことは、どのような力があれば大

学で学業で成功することができるのか、その力をアセスメントする、査定する基準、クライテリアが必要なのだと考えています。というのも、選抜の厳しい高等教育機関に入れるということは、非常に貴重な消費財を与えられる、手に入れるということですから、学生がドロップアウトしてしまったら、これは納税者の大事なお金が台なしになったことになります。

質問者

一つ質問があるんですけれども、そのアドミッション・ポリシーの決定に関して、どこが、だれが最もその決定権を持っているのか。先ほど、評議会というふうなお話でしたけれども、ちょっと聞き落としましたけれども、それが理事会であるのか、学内の協議集団の評議会であるのか、あるいは議会であるのか。

田中教授(司会)

同じ質問ですが、ちょっとだけそれに加えると、ずっとアドミッションズ・ポリシーの見直しだとか検証というのが定期的に行われていますけれども、それは一体どこが担当をして、どういう組織で、一体だれの責任でもって行われているのかを加えていただけますか。

ダグラス教授

正直に答えるのは難しい質問ですね。

法的手続を申しますと、英語で言うとボード・オブ・ガバナンスと言います。理事会が教授陣、ファカリティースェネット、教授陣の中から専門委員会のようなものを任命して、アドミッション・ポリシーの振り返り、見直し委員会のようなものを任命します。これはUC全体、キャンパスごとではなくて、それから州立大学とかは含まず

に、カリフォルニア大学全学的なアドミッション・ポリシー評議会のような会を持ちます。このアドミッション・ポリシー評議会が時には非常に大きな変更を提案することもありまして、これをどこに提案するかというと、この一番もとの理事会に出すのです。ボード・オブ・リージェンスとかボード・オブ・ガバナーと呼ばれるところに戻します。

そんな法的決まりにのっとりた手続ばかりではありませんで、これは、カリフォルニア大学全体の総長というんでしょうか、一番上の方とそれぞれのキャンパスのトップの方との間にいろいろやりとりがありまして、この理事会メンバーの中には、教授会メンバーが何を言おうが構わないよ、こっちはこれをやりたいんだからというような人もいますので、たくさんの政治的な駆け引きが行われます。

ケントがメモを回してきて、UCにどれだけたくさん学生がいるんだか言いなさいよというので言いますけれども、9つのキャンパスで、学部生だけで18万5,000人おられます。それで、ケントの時間をとっちゃいましたけれども、これでいい口実になるかな。

田中教授(司会)

よろしゅうございますでしょうか。まだご質問はあろうかと思いますが、本当はこれでもって半日ぐらい、きちんと議論をしたいところですけども、また改めてということになろうかと思います。

ちょうど今、ジョン・ダグラス先生の履歴が皆様のところにあろうかと思いますが、その中に、今お話が出てきましたカリフォルニアのシステムワイド、UCのシステムワイドのアカデミックセネットというお話がありましたけれども、彼はその首席政策分析官を長年務めておられたことでもありますので、今のような活動に長年かかわったご経験がある、こういうことだろうというふうに思います。

また、この議論はたっぷりまた、どこかでできたらいいかなというふうには思いません。ありがとうございました。(拍手)

田中教授(司会)

次に、アメリカから太平洋を渡りまして台湾の話になりますが、その前に、ちょっと私、先ほどご紹介を忘れました。きょうの通訳をしてくださっておりますのは、冠木友紀子さんという優秀な通訳者でございます。よろしくお願いをいたします。



SAT (Standardized Tests) and US Public University Admissions Policies

College Admissions International Senior Seminar
 Choosing College Students – Access, Equity, and Quality
 November 14 2009
 NCUEE

John Aubrey Douglass
 Senior Research Fellow - Public Policy and Higher Education


CSHE Center for Studies in Higher Education
 UNIVERSITY OF CALIFORNIA - BERKELEY




The Talk Tour

- Admissions and the Purpose of Public Universities
- Admissions Policy Case Study - the University of California
- Continuing Controversies Regarding Testing
- A Few Concluding Thoughts


John Aubrey Douglass
 Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley



1. The Purpose of Public Universities



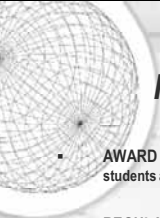
John Aubrey Douglass
 Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley



Diversity of US Higher Education

- About 8-10% of US HEI's are highly selective in admissions - including both private and public universities and liberal arts colleges.
- About 30% are moderately selective in admissions.
- Most are low selective or open enrollment (community colleges)
- 80% of all US HE enrollment is in public institutions.

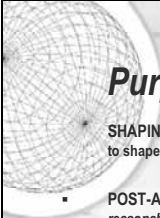
John Aubrey Douglass
 Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley



Purpose of Admissions Policies?

- **AWARD** - To create an academic standard (for example, test scores) in which students are awarded entrance to a selective or semi-selective university.
- **REGULATE THE NUMBER OF STUDENTS** - Admission policies set to control the numbers of students accepted and who enroll.
- **REFLECT THE NATIONAL OR STATE POPULATION** - calibrate admissions policies to provide a student enrollment that "reflects" the demographic characteristics of the universities designated pool.
- **SHAPING HIGH SCHOOL CURRICULUM** - setting subject and course requirements to positively shape school curriculum.

John Aubrey Douglass
 Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley



Purpose of Admissions Policies?

- **SHAPING STUDENT BEHAVIOR** - admissions requirements of universities set to shape the academic and extracurricular activities and talents of students.
- **POST-ADMISSIONS ACADEMIC SUCCESS** - admissions policies set that *reasonably* predict the academic success (specifically grades and graduation rates) of students once they enter the university.
- **POST-ADMISSIONS UNIVERSITY ENGAGEMENT** - admissions policies that reasonably predict both Academic and Civic engagement - where students take full advantage of all the opportunities offered by universities both in and outside the classroom.
- **CORRALARY "MOST TO GAIN"** - might admissions policies be structured to provide access to successful students who we know are the most academic and civically engaged: for example, a pool of low income/disadvantaged students who we know do well academically and are most engaged in the opportunities given to them at a university.

John Aubrey Douglass
 Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley

Purpose of Admissions Policies?

An on-going debate:

How do Standardized Tests help to achieve the purposes of Admissions policies?

John Aubrey Douglass
Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley

Politics and Policy

Ultimately, we need to recognize that admissions policy is:

- The distribution of a highly and increasingly sought public good - particularly at selective universities.
- Shaped by issues including socioeconomic mobility AND economic development of nation-states.
- A political decision - who gets what, where, when, and who gets to decide?
- A policy process that is not always rationale.

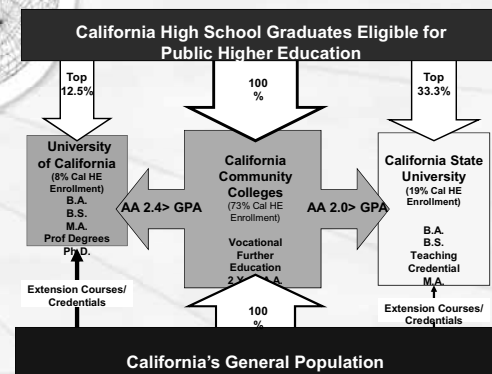
John Aubrey Douglass
Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley

2. The Case of the University of California



John Aubrey Douglass
Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley

California HE Matriculation



John Aubrey Douglass
Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley

UC's Social Contract

- Admissions Policies intended to shape high school curriculum and student behavior.
- Reasonably predict academic success at the university.
- Set admissions standards to select from the top 12.5 percent of high school graduates.
- Offer admissions to all "UC eligible students" to one or more campuses of the UC system (9 undergraduate campuses).
- Seek admissions policies that are inclusive - definition changes over time (e.g., geographic > economic class > race and ethnicity . . .)
- Selection at the UC Campus level - including Comprehensive Review
- Ancillary Requirement: admissions requirements must be relatively clear and transparent – creating a set of standards and goals for prospective students.

John Aubrey Douglass
Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley

UC's Social Contract

Hence, two major components of admissions policy:

- ELIGIBILITY to the UC System
- SELECTION at the campus level

John Aubrey Douglass
Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley

UC's Eligibility Index

UC Eligibility Index: 2009

California Residents
 Minimum UC Test
 "A-G" GPAScore Total
 3.00 – 3.04 223
 3.05 – 3.09 210
 3.10 – 3.14 198
 3.15 – 3.19 187
 3.20 – 3.24 175
 3.25 – 3.29 165
 3.30 – 3.34 157
 3.35 – 3.39 152
 3.40 – 3.44 147
 3.45 & above 143

Non-California Residents
 3.40 – 3.44 147
 3.45 & above 143

About the Grade Point Average
 All campuses use the same method of calculating a preliminary grade point average for purposes of determining an applicant's UC eligibility. The GPA is calculated based on all "a-g" subjects completed in grades 10 and 11 — including summer sessions — by assigning point values to the grades a student earns, totaling the points, and dividing the total by the number of "a-g" course units.

Test Score Total
 For students who took the SAT Reasoning Test: Convert their highest scores in critical reading, math and writing from a single sitting and their two highest SAT Subject Test scores from two different subject areas to equivalent UC Scores (see the SAT Test Score Translation table, below left). Then add the five UC Scores to produce the UC Score Total (critical reading + math+ writing + subject test 1 + subject test 2). For calculating UC scores and translation of ACT scores, see Appendix 1.

John Aubrey Douglass
Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley

Validity Studies at UC

GPA the best predictor of academic achievement at UC - and other selective US universities and colleges.

Subject tests better than "aptitude" tests (e.g. SAT)

Better is GPA and Subject Tests - but there is great variance and ultimately in is surprising how little standardized test predict anything.

At UC: self-selected group of students.

John Aubrey Douglass
Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley

SELECTION - Multiple Paths Today

"Comprehensive Review" for Freshman Applicants at UC

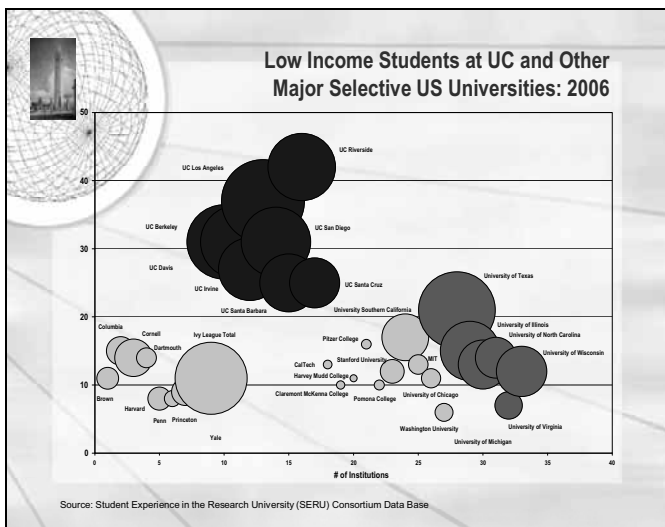
- Number of academic courses beyond a-g requirement
- Number of Advanced Placement and Honors courses – provides college credit
- Eligibility in the Local Context (ELC) ranking student within top 4 percent of their high school – provides special admissions path with no standardized test requirement
- Quality of a students high school senior-year academic program
- Academic performance in light of students life experiences and special circumstances
- Engagement in community service activities and special projects
- Outstanding performance and Special Talents in one or more academic areas – such as music, acting, writing, math, or sports.

John Aubrey Douglass
Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley

The Socioeconomic Impact?



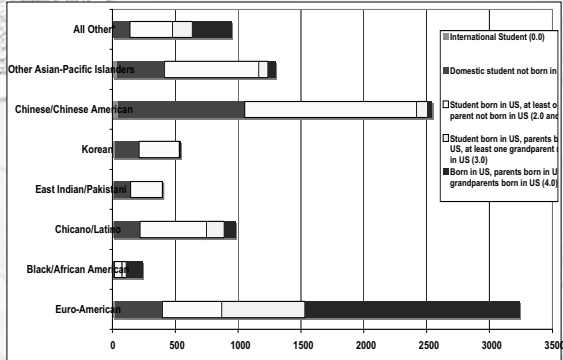
John Aubrey Douglass
Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley



Academic Performance of Low and High Income UC Students (first and Second Generation College Students): 2006

	First Generation	Second+ Generation
Lower Division Fresh Entrant		
Pell	2.75	2.94
Not Pell, but need-based	2.85	3.03
No aid, <\$125k	2.98	3.18
No aid, \$125k+	3.08	3.23
Gap between Poor and Rich	-0.33	-0.29
Upper Division Fresh Entrant		
Pell	2.95	3.08
Not Pell, but need-based	3.01	3.16
No aid, <\$125k	3.12	3.28
No aid, \$125k+	3.15	3.31
Gap between Poor and Rich	-0.20	-0.23
Community College Transfer		
Pell	2.96	3.06
Not Pell, but need-based	2.98	3.05
No aid, <\$125k	3.10	3.16
No aid, \$125k+	3.05	3.09
Gap between Poor and Rich	-0.09	-0.03

UC Racial/Ethnic Enrollment by Immigrant Background: 2006



Source: Student Experience in the Research University (SERU) Consortium Data Base

3. Continuing Battles Over the Use of Standardized Tests



John Aubrey Douglass
Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley

Tests versus Grades - US Example

- Subject versus Aptitude Tests - what the research says
- Grades in HS versus Tests
- What groups are included or excluded?
- Shaping student behavior
- Need for HEI's to do their Home Work - or educational R&D

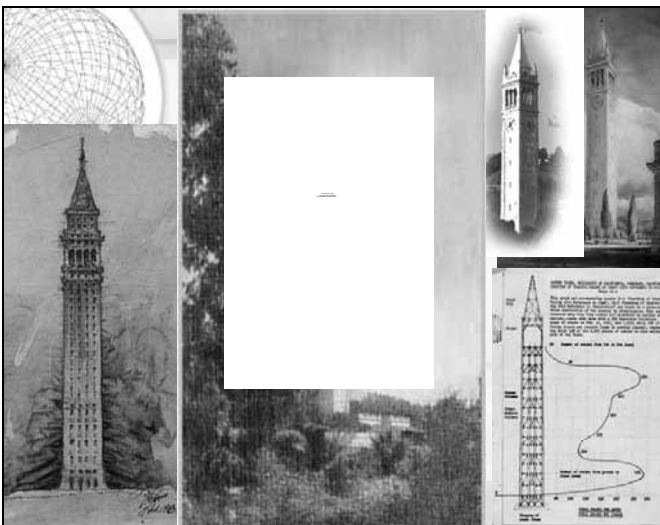
John Aubrey Douglass
Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley

Thinking of Japan

Japan Context and Issues

- Declining population and number of prospective students
- Restructuring of Higher Education Sector
- 300K International Student Plan
- **The Power of Admissions Policies at Selective Universities** - Rethinking how to admit and shape behavior of student in high school AND at the university.

John Aubrey Douglass
Center for Studies in Higher Education - UC Berkeley



Stanford University Press
douglass@berkeley.edu
http://cshe.berkeley.edu/

講演 2 “College Admission in Taiwan – Access, Equity, Quality”

「台湾の大学入学者選抜—進学機会と質保証」

Sheng Yao Cheng

(台湾国立中正大学 教育学部 准教授)

こんにちは。

実は、私の祖父母は大変日本語が上手でして、もう95になりますけれども、祖父母は日本で学位を取ったものですから、日本のすばらしい点について僕にいろいろ話してくれました。だから、日本に来るたびに、ふるさとへ帰ってくるような気もします。

ごらんのように、きょうは台湾の大学入試についてお話しします。

私はケントです。

これが今日の概略ですけれども、まず導入のお話をしてから、台湾の高等教育の背景、歴史的背景をお話しして、3つ目に現在の大学入試が抱える問題、それから、4つ目がE P A Mと呼ばれる高等教育の政策を評価するモデルをご紹介します、最後にまとめを申し上げます。

この大学入試のことを取り上げますときは、いつもこのイメージを使うんですけれども、これがまさに今の台湾の大学生の感じなのです。一体これからどうなるんだろう、どんな結果が得られるんだろうと、ちょっと困った、混乱したような顔をしています。まさに大学入試の混乱ぶりがこんな感じなのです。

一番上に書いてありますように、儒教的、孔子の影響が強いものですから、教育を何にも増して大事なものとする傾向が人々の中に強くあります。

2つ目に、学歴重視の社会ですから、高等教育機関の卒業証書を持っている、学士号を持っているということは、台湾の社会である意味を持ちます。

台湾の高等教育機関は数・量では大突破口を開きましたけれども、できればこれから質的な突破口も開きたいなと思っています。高等教育機関の数は増える一方ですので、今、台湾では高等教育は人気産業、盛んな産業の一つです。2009年9月の段階で高等教育機関は162もありまして、ほとんど高校卒業生の100%がどこか高等教育機関に入学できることになります。

この入試に絡む問題には背景がありまして、それを3つに分けますと、政治の次元、経済の次元、社会の次元と、3側面に分けることができます。

1987年に戒厳令が解除されまして、中央集権的な体制から地方分権化、非中央化となったのですけれども、質の問題が表面化してきましたので、再び中央化しつつあります。それから、政策決定、政策立案における民衆の参加が求められるようになりまして、1994年4月10日には教育改革を求めるデモが行われました。これを4月10日デモと呼びます。

それから、経済の次元で考えるべき点は、市場経済化とグローバル化です。まず1つ、台湾はWTOに加盟し、国際競争の圧力を受けます。それから2つ目、世界は知識ベースの経済、知識経済のため、高等教育の卓越性の追求が必須です。それから3つ目、この時代は情報とコミュニケーションテクノロジーの世界です。

それから、卓越性と公正さの間で葛藤がありまして、1つは、地球規模の競争における卓越性の追求です。それと同時に2つ目は、中等教育後の教育と高等教育に対する平等なアクセス権です。

それから、この数十年の教育改革を振り返りまして、どこかそこに高等教育のためのヒントがないかと考えました。

95年に台湾初の教育報告書が出まして、ここには、大学へ入るためのプレッシャーを下げるものと記されています。

96年に、これは政府からではなくて教育の専門家の人たちの間から、市民教育変容のための青写真というような趣旨の報告書が出されまして、ここに書いてあるような、例えば高校や大学を加えること、追加することなどと、このような項目が挙げられました。96年には、教育省の大臣であったユアン氏の委員会から教育改革報告書が出されまして、その中で最も大きな2つのポイントは、この赤くなっているところ、「大学へのアクセスをスムーズなものにする」というのと「教育の質を高める」の2点が指摘されました。

さっき言い忘れましたが、その96年の報告書が今も影響力を振るっているんですけども、98年には「学び続ける社会のために」という報告書が出されまして、高等教育機関の中にもさまざまな種類を設けようと。例えば研究中心であったり、教育中心であったり、あるいはコミュニティー関係のことをしたりというふうに、さまざまな層をつくるということが指摘されました。

2000年には教育改革行動計画が提出されまして、今、この赤いところ、高等教育機関における卓越性を達成する、これに取り組んでいるわけです。

目下の大学入試の問題は、入学の仕方がいろいろであるということ、それからもう一つは積極的に是措置のこと、それからもう一つが質と公正さ・平等性のこと。

大学へ入るにも道は複数なのですけれども、高校卒業生の8割から9割は一般入試を受けます。

ここ10年で次の2つが出てきたんですけれども、もう一つが志願といいますか、これは自己推薦。自分自身で行きたい学校を決めまして、自分の学びのポートフォリオをつくって、そこで学ぶ目的などを書いて、自分で準備をするんです。これはいいんですけれども、例えば学校にすごくすぐれた先生がいらして、生徒が準備するのを手伝いしたりするという、そういうずるい問題があるんです。本当です。その先生が、自分の子どもがいい大学へ入れるように、うちでこのポートフォリオづくりとかを手伝うという問題が起きているんですよ。まあいいんですけれども、問題はあります。

3つ目が、推薦といっても学校推薦というようなもので、先生たちが学生の強みを見つ

けて、例えばこれで賞をとったとか、競争で勝ったとか、何か発表したとか、そういうことを推薦書にして出す。これもいいんですけども、何か問題があるかという、その賞ですよ。ある学年とかクラスで何とか賞というのをたくさん出して、だれでもとれるようなのにしたのなら、その賞が何だかわからないです。学校で自分で賞をつくっちゃうのです。

さっきジョンがグレードインフレーションのことを話してくれましたけれども、同じことです。先生たちは、なるべく生徒にいい扱いをしてあげたいなと思いますので、何だかGPAは5点満点なんていうのがたくさんいるんですね。本当かどうかわからない。

積極的是正措置については、さっきジョンの話してくれたのと似たような話なのですが、台湾でも民族的背景を考慮したものがあって、今、台湾では先住民と呼べる人たちは2%くらいしかいないんですが、もし先住民の方だったならば、高等教育機関にアクセスするスコア、3割5分増しになります。35%、うん、そう、3割5分増しになります。もちろん必要条件もあります。自分の民族言語を知っているかどうか、それから、自分の民族についてある程度、このことは知っていますかという必要条件がつくられています。人々の中には、ただ先祖がそうだからって、血がつながっているからといって先住民だと言う人もいますが、文化的には何も知らない、それでは困るのです。だから、これだけスコアをつけるのですから、学んだ結果、自分の民族に何かができる人であることが必要なのです。

次の、地域性が考慮されるのは二、三%の人なんですけれども、遠く離れたところからやってくる学生の場合は、点数がプラスされるわけではないのですけれども、よりトップの名声のある高等教育機関にアクセスしやすくなるそうです。

では、これから、国が大学1年生について調べたもの、2005年と2007年のものをお目にかけてみます。

実はまだ台湾の高等教育機関は、ちゃんと層が分けられている、種類が分けられているわけじゃないのですけれども、ちょっと便宜上、4つに分けてみました。一流公立、普通の公立、一流私立、普通の私立。これまでの評価ですとか成果のおかげで、台湾では公立大学のほうが、特にトップの公立なんかは私立大学よりもずっと位置づけが高くなっています。この4つの種類から5校ずつ取り出して、全部で20校にして調べました。

1年生の数は6,519人です。大学入学と個人的状況の関連性を調べたかったので、親御さんの教育学歴とか、性別、世帯年収、民族的背景、地域などなどの項目で調べました。

子どもが台湾の一流大学に行く確率は、お父さんの学歴が大学院卒の場合、学部卒よりも、あるいは短大卒よりも、高くなります。お母さんの学歴のほうがお父さんの学歴よりも影響が大きくて、お母さんが短大以上を卒業していると、それ以下の場合とは明らかな違いがあります。さっきジョンが第一世代、第二世代と言った、あれと似ていますね。

男の子のほうが女の子よりも一流大学へ行くことが多い。

これは、去年までは仕切り方を変えていたんです、世帯年収について。でも、台湾の年

収分布はグラフにするとM字を描いているので、分け方を変えなきゃと思い、今年からこういうふうには500万台湾ドル以上、それから50万台湾ドル以下、まず、このように分けました。

民族的バックグラウンドとしては、中国本土出身者のほうが客家や台湾土着先住民の人よりもトップ大学に行きやすいですね。

地域性で見ると、北部・中部の人たちのほうが南部・東部の人たちよりも大学へ行きやすいです。

こうしたことは、やはり大学入学と関係があると思いますので、これまでの報告書も参考にしながら、これら4つの要素で調査をしたいと私は考えました。1つは平等性・均等性と卓越性、2つ目が選択と効率、3つ目が新右翼・新左翼、4つ目がグローバリゼーションとローカライゼーションです。

これはE P A Mという教育政策を振り返るモデルなんですけれども、だれでも教育政策というと、まず大学へのアクセスなんていうふうには、平等性・機会均等性のほうを考えますけれども、同時に大学は卓越性も求めなくてはいけないし、選択の豊かさと効率の間では苦しみがつきものです。この軸は、もちろんローカライゼーションという文脈の中に置かれるものであって、そのローカライゼーションはさらにグローバリゼーションという文脈に置かれています。もちろん、その背景には新左翼とか新右翼という哲学的というか思想的背景もあります。

公平性を考えるときには、この3つの要素、3つの部分があると思います。学校へ来る前の段階、入学前のアクセスの部分と、学校にいる間の機会、それから学校を出た後の成果、結果という要素です。アファーマティブ・アクション、積極的是正措置というのは、学校へ入る前の事柄です。

効率性ですけれども、以下の事柄をどのように経営し分配するか、配分するか、考えなきゃいけないわけなんですけれども、例えば限界のある、人間的、物質的、経済的リソース、時間、地域、場所あるいは空間、教育環境の地域的あるいは空間的条件。このようなことを考えなきゃいけません、まさにこのセンターがそういうことを考えていらっしゃるでしょう。

それから、選択、意思決定は、自身の欲望、望みと意思によってなされなければいけません。つまり、学生、両親、学校の自治ですね。学生や親というのは、ただ教育を受ける側の教育の対象ではなくて、彼らなりの働きかけができなくてはなりません。学生たちは消費者ですので、こちらからエンパワーメントすることも必要です。

卓越性に関しては、学校教育の質を高いものにする、それから、エリートの上の教育機関へのアクセスを保障すること、そして、世界レベルの大学を台湾に持つこと。それから、さまざまなタイプの学生を受け入れるのですから、このようなさまざまな知性のあり方を規定しました。例えば感情マネジメントですとか、対人関係での気づき、社会的な気づきですとか、チームの仲間との協力などです。

それから、グローバリゼーションとローカライゼーションについては、グローバリゼーションのほうで文化ですとか世界共通言語とか世界市民としての自覚とか、ローカライゼーション、地域性のほうでは、例えば伝統的な価値観とか文化、知識、母語、それから市民としてのあり方。例えば国家の役割を考える大切さです。

どうも台湾の政府を余りにグローバリゼーションのほうに気持ちが傾き過ぎているようで、あるとき、さっき3つの志願制度があると言いましたよね、自己推薦の中で7つの言語が話せるという学生が来ました。その子は、スペイン語とフランス語とドイツ語と、もちろん英語と日本語と、あとは何だったか忘れてしまいましたけれども、これは親御さんが、毎夏毎夏その国へ行ったり、家庭教師をつけたりして、毎年3万ドルもかけて、そういうふうにしやべれるようにしたんですね。そんないろいろ話せるものだから、台湾のトップ10の大学に強引に入学をさせたというわけです。でも、例えば客家の言葉が話せるとか、台湾の先住民の言葉が話せたって、こんなご褒美はもらえません。

日本にも北海道にアイヌの方がいらっしゃるから、言語のこと、どうなっているのかなと思います。

その次は新左翼と新右翼のことですが、新右翼の人たちはネオリベラルの立場をとり、市場経済とか消費とか、社会的ダーウィン論などを支持しており、ダーウィン論というのは優勝劣敗、強い者が残る、強ければ生きていけると思っています。よりよい暮らしが欲しければ強くなればよいと思っているのが社会的ダーウィン論者たちで、また新保守主義者たちというのは、伝統的な価値観、伝統文化とかナショナリズムのほうです。

それから新左翼の人たちは、この批判理論、例えば社会正義を求めたり、経済的、ジェンダー的格差、階層間の格差、平等性に注意を払ったり、あるいは批判的教育論者、何を批判するのかといえば、公正に代表されていないグループの人たちのことを振り返らねばならないという点で批判的なのだそうです。例えば、一つ台湾でプロジェクト、大きなプロジェクトをやったことがあるんですけども、普通の教授方法ではうまく学べない、つまり、一般の学校でうまく学べない子どもたちのために、特別な教材を用意したこともあります。メインストリームではない人たちのそれはここへ入るんですね。

また、より高度な教育を受けられるように、アクセス権を広くしてクライテリアを下げています。そのことにより、一旦卒業した後、戻ってきて学び続けられるように、就職した後により高い学位を取ることができます。ずっと学び続ける学生がいつもいいとは限らないことがわかったのです。休みが必要な学生もいますよね。だから、1年とか2年とか休学して戻ってきて、そしたらまた戻ってきて学び続けられるようにしています。

卓越性に関しては、これもまた赤いところが3つで、高等教育の質を高める、高等教育機関の多様性を高める、高等教育機関内での卓越性を達成する。こうした事柄をモニターするために、国立教育研究機関というものがあります。

選択肢に関しては、教育の自由化、それから教育制度の規制緩和、それからマイノリティー、少数民族の人たちの生涯教育、生涯学習の機会を拡大することができます。

効率性に関しては、学校自体が自分たちなりの改革案を持てるということ、それから学校ベースのマネジメントです、カリキュラムや財政、それから運営に関しての。それから、高等教育機関の評価方法も必要だと考えています。

新右翼に関しては、教育システムの法制度の規制緩和、2つ目は柔軟性のある複数のアクセス方法をつくり出すということ、それから3つ目が、グローバル化の競争のために企業に適切な機会を与えることです。

新左翼に関するものについては、教育基本法の制定、それから少数民族の人の生涯学習の機会を拡大する。これは社会正義と関係がありますね。それから、少数民族の学生のための教育の機会です。

グローバルイゼーションに関しては、国際的なプロジェクトや企業のプログラムを交換するという、それから留学生に留学制度、それから世界共通言語を必要とします。

ローカライゼーションに関しては、地域の言語や文化を現在の教育改革のカリキュラム改革の中にも入れること、それから新しい大学院、土着のといいますが、先住民族の言語・文化に関する新しい大学院を設立することです。

最初の結論として、ここに書いてあるのは政府の言っていることなんですけれども、台湾政府は、もう100%の高校卒業生が大学へ入れるようになりましたので、これはもう卓越性のほうに集中するときだと言っていますが、私の発表でごらんになったように、まだまだ親の学歴だとか性別とか地域性で、公平性にまだまだ問題がありますので、まだ公平性の問題に取り組むべきだと考えています。台湾政府は効率性を高めることに注意を払い過ぎてきていると思うのです。私は、むしろ選択のほうに注意を向けるべきだと思っています。

新右翼の人たちは市場経済化などのことを言うんですけども、確かに公共政策の場面で教育改革に関して随分大きな声で物を言いますが、そればかりでなくて、むしろ新左翼の社会正義のほうに注意を向けるべきときだと思います。

グローバルイゼーションのほうがローカライゼーションに比べて余りに重く扱われ過ぎているとも思うのです。言語の問題も含めて、私は、このローカライゼーションのほうをもっと取り組むべきだと思います。それが問題だと思っています。

私は常に、EPAMのさまざまな次元、すべてをとらえて、すべての面を含めて考えることが大事だと思います。ここに書いてある政府的な結論というのは、私たちの未来のことを考えると、これはいい結論とは思えません。

お聞きくださってありがとうございました。皆様の感想をぜひ伺いたいと思います。(拍手)

コメントと回答

田中教授(司会)

チェン先生、ありがとうございました。

コメント等ございますでしょうか。いかがでしょう。

ちょっと私から。この台湾の変化といたしますか、昨今の動きというのには、どこかモデルがあるんでしょうか。

チェン准教授

日本を結構お手本にしています。実は、修士論文で香港と日本の入試のことも研究しました。台湾を見てみますと、入試制度の歴史を振り返って、その発展を見ると、ある意味、日本の後をついてきているところがあるなと思います。

田中教授(司会)

実は、台湾の今回のお話のときにお願したもう一つのところは、最近、台湾の先生方によく伺うと、台湾の昨今の大学の変化は、どうも日本を追いかけているという話をよく伺うんですね。そのことの意味がよく理解をできていなかったんですが、なぜ日本だろうというようなところがあったわけですが、今後もそういう傾向は続くのか、あるいは欧米にそういった範を求めるといようなことはないのか。あるいは、試験制度の問題もそうですけれども、大学の固有のテストによるのか、あるいは統一テストのような形の流れをくむのか。そのアグレゲーションのシステムは、どうも日本よりは、少なくとも活動そのものはかなり先行しているというのは、よくあることですが、わかっていることですが、それ以外のところはいかがでしょう。

チェン准教授

もし台湾のほうが日本よりも一歩進んでいるところがあるとすれば、もう既に100%全入時代になっていますからね。

確かに日本も参考にしましたけれども、例えば少数民族などへの、あるいは遠く離れたところに住んでいる学生のための積極的は正措置などは、アメリカを参考にしていますし、オーストラリアを参考にしている部分もあります。台湾には、このセンターと同じような研究調査のためのセンターがありまして、いろんなことを扱っていませんけれども、私の修論は、このセンターに研究資金を出してもらいまして、奨学金を出してもらって、それで、日本やら韓国、それから中国本土、オーストラリア、フランスなどへ行って、さまざまな要素を持ってきたんです。

だから、日本だけ、100%日本のまねをしているわけではありませんが、日本に学んだところがあるとすれば、モデルとするとところがあるとすれば、同じように儒教的な背景を持っていますよね。それから、平等性、公平性とか、グレードインフレーションとか、何かそのあたりの傾向が、今後にわたっても、将来においても、きっと似たところは続くんじゃないかと思っています。

質問者

日本は長く、戦後、アメリカを非常にモデルにしてきたと思うんですね。しかし、やはりここ10年か15年というのかな、むしろ法人化ということの中でイギリスをモデルにしてきたように思います。そして、逆に日本は今モデルになるというよりは、日

本の高等教育は非常に混乱しているんじゃないかということなので、ひょっとしたら両方の悪いところをまねてきたのかもしれないという反省もあるわけですね、言い過ぎですけど。でも、だからこそ、大衆化というキーワードの中で、本来高等教育はどうあるべきかということは今、改めて問われているんじゃないかと個人的には思っていますけれども、先生はどうでしょうか。

チェン准教授

ここに来る前、台湾の大学入試センターへ行きまして、私の恩師の名刺をもらってきて、それを荒井先生に差し上げたところなんですけれども、日本と台湾は物の考え方とか社会のあり方とか学歴のとらえ方がとても似ているので、密接なやりとりをこれを機に始めたらいいのでは、互いに学ぶところが大きいのではないかなと思うんですね。まるっきり文化の違う別の国から学ぶよりは、似ているんですから、お互いにやりとりをできたらいいと思います。

田中教授(司会)

そのほか、いかがでございましょうか。

質問者

ご講演、ありがとうございます。

100%という進学率の内実が知りたいんですけれども、いろんな威信の高い高等教育機関、威信の低い高等教育機関、日本では水平の平等と、それから垂直の平等でしたっけ、そういうふうな言い方がありますが、何だっけ、水平の学歴と垂直の学歴というものがあるというふうな意見があるんですけれども、どうでしょう。

チェン准教授

おっしゃるとおりだと思います。

台湾はもう、一つの悪例なんですけれど

も、政府が大学、高等教育機関の質的保証をしたいと思ったものですから、1番の大学から162番まで、ずらっとランクで並べたんですね。162番目の大学へ行くなんていうのは、その学生にとって、これは名声とか名誉になり得るでしょうか。

この質的保証をするために、研究大学、2つ目はリサーチ大学と研究指導大学、3つ目が指導大学、教育大学、4つ目が教育とコミュニティ、地域奉仕大学、それから地域奉仕大学というふうに、5つに分けたんですね。今、ある私立大学、大企業がつくった学校がありまして、ここが、地域奉仕大学に自分たちを種類分けするなよというふうに、政治的圧力をかけてきているんですけれども、これはよろしくないことで。

実は、去年は164の大学があったんです。164あったんですけれども、実は163番と164番は、大学としてビリであるよりは短大として1番、2番になったほうがいいと考えて、一旦は総合大学としてアップグレードを申し出たんですけれども、それを取り下げてカレッジに戻った、短大に戻ったという話がありまして、おかしな話だと思いますね。

田中教授(司会)

ちょうど今入ってまいりました、最近の台湾の悪名高きカレッジランキングというのがよく聞かされるようになりましたが、そのところはきっとまだまだ議論ができるところだろうと思いますが、日本はまだランキングというのをやっておりませんので、それからしますと、どのような議論ができるかということがあろうかと思いますが、ちょうど時間になっておりますので、チェ

ン先生のお話をこれで終わらせていただきまして、また後ほどのディスカッションのときに、何かご意見がありましたら、お聞きできればというふうに思います。

ちょうどこれからブレイクに入りますけれども、予定として15分ぐらい、20分とりますか。そうすると何分だ、40分ぐらいからで。では、次に45分にスタートをさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いをいたします。

チェン先生、ありがとうございました。
(拍手)

(休憩)

田中教授(司会)

そろそろよろしゅうございますでしょうか。

それでは、お集まりのようでございますので、次のセッションを始めさせていただきたいと思います。

次は、荒井先生のほうからのご報告をちょうだいをしたいと思いますので、どうぞよろしくお願いをいたします。

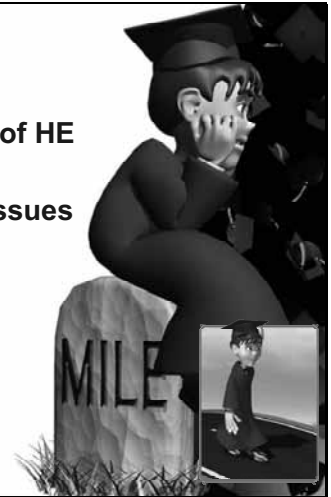
COLLEGE ADMISSION IN TAIWAN

(Kent) Sheng Yao Cheng
Graduate Institute of Curriculum Studies
National Chung Cheng University, Taiwan
kentcheng@ccu.edu.tw



Outlines

- Introduction
- History Background of HE in Taiwan
- College Admission Issues
- EPAM
- Discussion
- Conclusion



Introduction

- Confucius educational thoughts
- Credential Society
- Taiwan's higher education system has made a breakthrough achievement
- Higher education becomes a hot industry.
- In September 2009, there are 164 universities, million students, and percent enrollment rate in Taiwan.



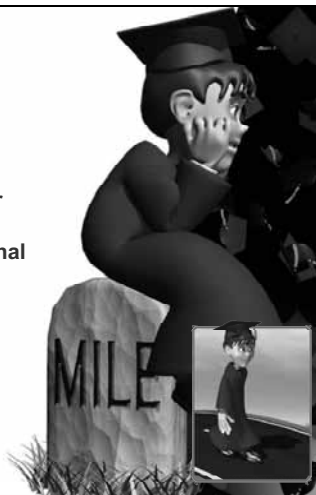
Backgrounds

- Political dimensions
- Economic dimensions
- Social dimensions



Political dimensions

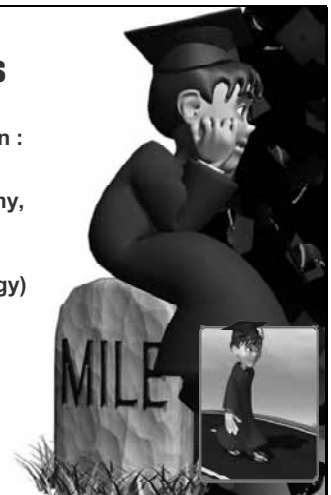
- 1987 Martial Law released: Centralized control to decentralized.
- Democratic participation for policy making: 410 demonstration for educational reform (April 10, 1994).



Economic dimensions

Marketization and Globalization :

1. WTO,
2. Knowledge Based Economy, and
3. ICT (Information and Communication Technology)



Social dimensions

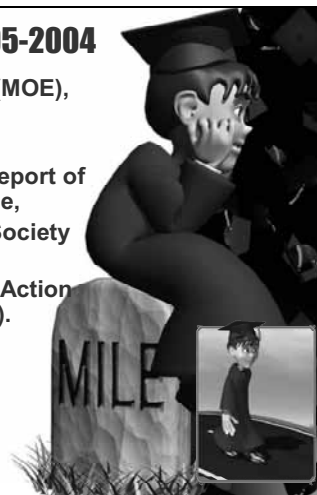
Dialectic between excellence and equity:

1. Equal access to post-secondary and higher education.
2. Excellence pursuit and global competition.



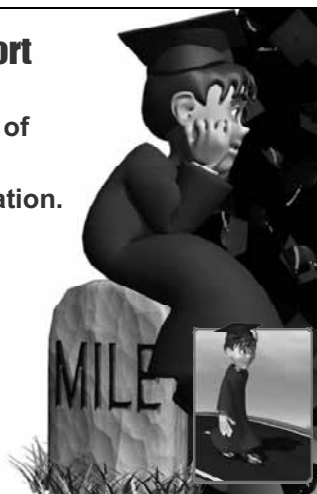
Educational Reform 1995-2004

- 1995 Educational Report (MOE),
- 1996 Civil Educational Transformation Blueprint,
- 1996 Education Reform Report of Executive Yuan Committee,
- 1998 Toward a Learning Society (MOE), and
- 2000 Educational Reform Action Program (Executive Yuan).



1995 Educational Report

- Reduce the pressure of access to college.
- Educational liberalization.



1996 Civil Educational Transformation Blueprint

- Practicable small class and school size
- Add high schools and Universities
- Advance education modernization
- Establish education fundamental law



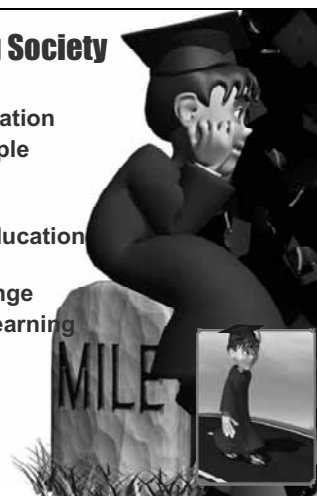
1996 Education Reform Report of Executive Yuan Committee

- Deregulation of education
- Promote all the students
- Smooth the access to College
- Ascend the quality of education
- Establish the lifelong learning society



1998 Toward a Learning Society

- Buildup the backflow education
- Open up flexible and multiple access
- Drive the schooling reform
- Develop multiple higher education institute
- Advance cram school change
- Enlarge minority lifelong learning opportunity



2000 Educational Reform Action Program

- Consolidation of elementary education,
- Making pre-school education widely accessible,
- Consolidating existing systems for teacher training and continuing education,
- Creating dynamic and quality technological and vocational education,
- Achieving excellence within higher education,
- Encouraging lifelong education and information education,
- Promoting family education.

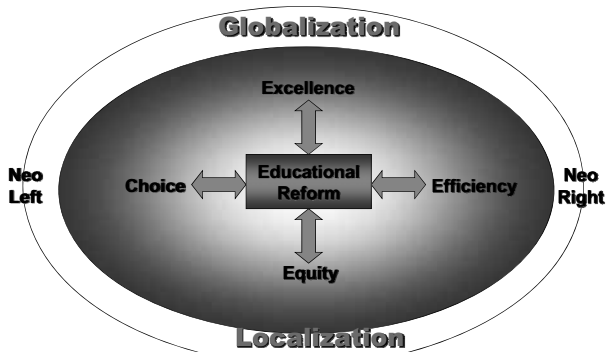


Educational Policy Analysis Model

- Equity/Excellence
- Choice/Efficiency
- Neo-Right/Neo-Left
- Globalization/Localization

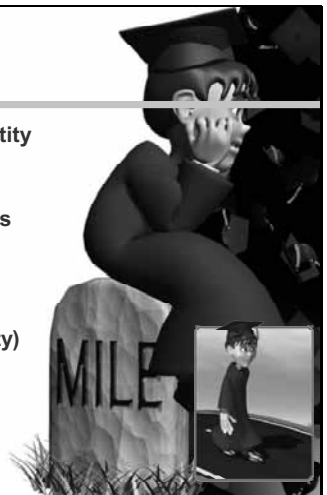


Educational Policy Analysis Model



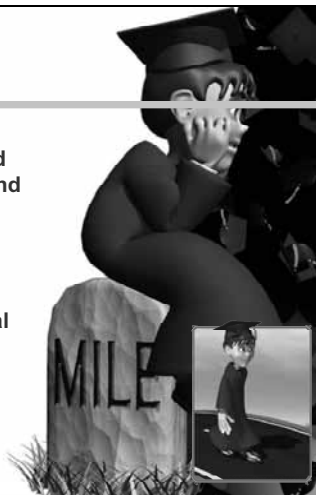
Equity

- Equality vs. Equity with quantity and quality
- Quality of being fair and reasonable in a way that gives equal treatment to everyone
- Three Segments of Equity:
 - Before School (Access)
 - During School (Opportunity)
 - After School (Outcomes)
- Separate but equal
- Affirmative Action



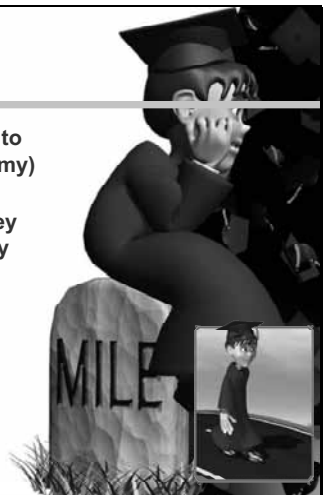
Efficiency

- How to manage/allocate limited human, material, and financial resources; time; and location or the space of educational environment
- How to accomplish equity, choice, and excellence according to the educational policy analysis model



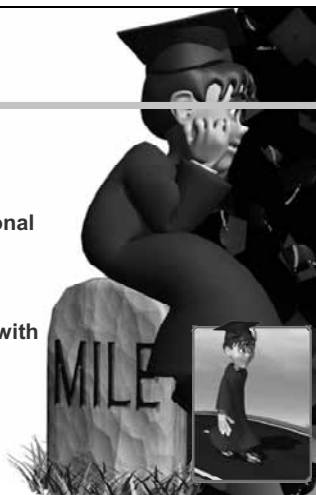
Choice

- Making a decision according to one's desire and will (autonomy)
- Students and parents are not only objects of education, they should have their own agency
- Students are consumers
- Empowerment



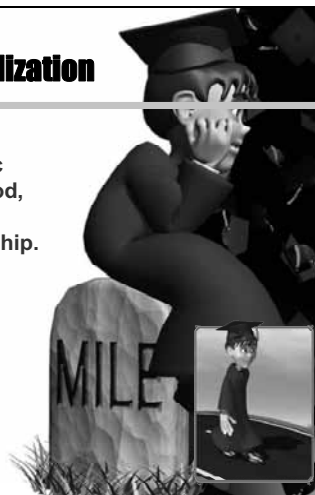
Excellence

- High quality of schooling, or access to elite institutions of learning
- National curriculum and national tests
- Multi-intelligence: Emotional management, interpersonal awareness, and cooperation with teammates.



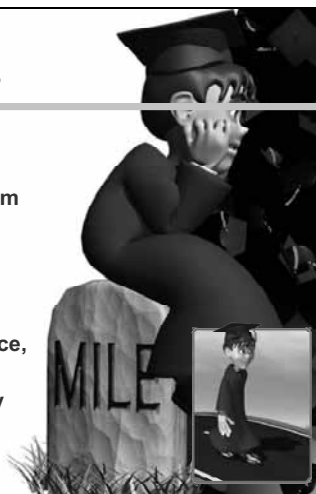
Globalization & Localization

- Globalization: unity/universalism, economic (capitalism), media (Hollywood, and internet), culture, global language, and global citizenship.
- Localization: diversity/individuality, traditional values, culture, knowledge, native language, citizenship (the role of state).

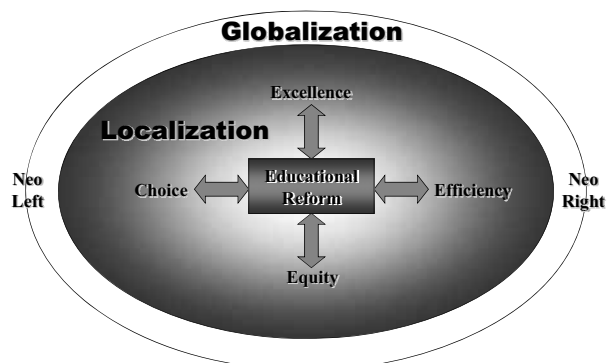


New Right & New Left

- New Right:
 - Neo-Liberals: market, consumer, social Darwinism
 - Neo-Conservatives: traditional values, culture, nationalism
- New Left
 - Critical theory (social justice, cultural industry)
 - Cultural studies (inequality of class, race, gender)
 - Critical pedagogy (Paulo Freire, hope and love)



Educational Policy Analysis Model (EPAM)



On Equity

- 1995 Educational Report: to reduce the pressure to access to college.
- 1996 Civil Educational Transformation Blueprint: to more high schools and universities.
- 1996 Education Reform Report and 1998 Toward a Learning Society: to promote all the students, and buildup the backflow education.



On Excellence

- 1996 Education Reform Report of Executive Yuan Committee: to ascend the quality of education.
- 1998 Toward a Learning Society: to develop the diversity of higher education institutes.
- 2000 Educational Reform Action Program: to achieve excellence within higher education and to setup a long run National Institute of Educational Research to monitor the development of education.



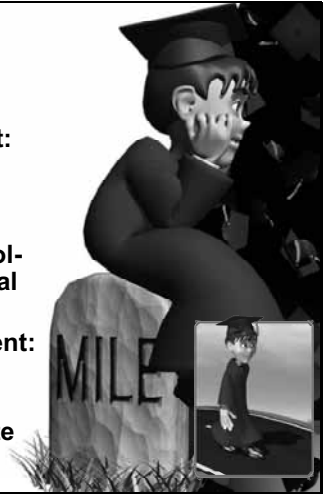
On Choice

- 1995 Educational Report: educational liberalization.
- 1996 Education Reform Report of Executive Yuan Committee deregulation of educational system, especially in laws and local autonomy.
- 1998 Toward a Learning Society: enlarge minority lifelong learning opportunity.



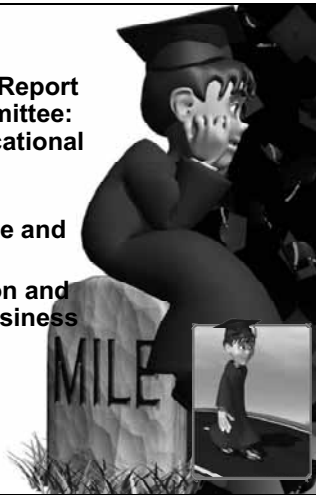
On Efficiency

- 1996 Civil Educational Transformation Blueprint: to reduce the size of classes and schools.
- 1998 Toward a Learning Society: to setup a school-based reform was the vital factor.
- School based management: curriculum, finance, and administration.
- Higher Education Institute Evaluation.



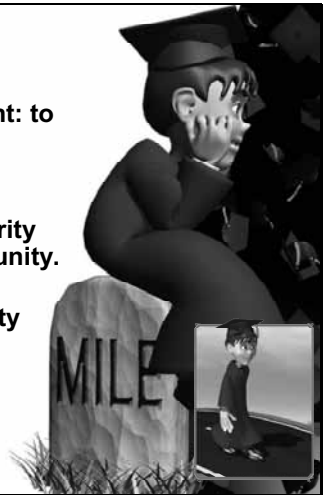
On Neo-Right

- 1996 Education Reform Report of Executive Yuan Committee: the deregulation of educational system.
- 1998 Toward a Learning Society: to create flexible and multiple access.
- Globalization competition and cooperation between business and schooling.



On Neo-Left

- 1996 Civil Educational Transformation Blueprint: to establish education foundational law.
- 1998 Toward a Learning Society to enlarge minority lifelong learning opportunity.
- Equality of educational opportunities for minority students.



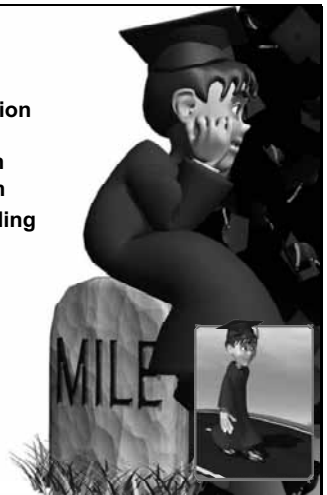
On Globalization

- International exchange program and project cooperation.



On Localization

- 2000 Educational Reform Action Program: to cover the local languages and culture also in the current curriculum reform
- New graduate schools regarding indigenous languages and culture.



College Admission in Taiwan

- Pay more attention on Excellence than Equity.
- Efficiency is emphasized more than Choice,
- Neo-Right predominated in the public sphere of educational reform,
- Globalization played a more important role than Localization.



**Thanks for your listening
and I am looking forward to
having your feedback.**



講演3 “An Current Issue of College Admissions in Japan”

入学者選抜の課題 — 多様化の中での質的保証 —

荒井 克弘

(大学入試センター 試験・研究副統括官／入学者選抜研究機構長)

入学者選抜研究機構の荒井でございます。進め方ですけれども、田中先生と私で少し相談しまして、私のほうの報告は逐次通訳というよりもウィスパーリングでもって、冠木さんのほうに3人の外国の研究者の方にはポイントを通訳をいただいて、私のほうはそのまま流して日本語でしゃべって報告してしまうという形にしたいと思います。内容が流れないように気をつけますけれども、よろしく願いいたします。

今回、私のほうの報告は、先ほど田中先生のほうから、今までに出ない新しい話をというプレッシャーをいただきましたけれども、そんなに新しい話は出てはまいりません。既にジョンからも、それからケントからも、ダイバーシティな話、あるいはクオリティー・アシュアランスといいますか、クオリティー・ギャランティーの話が出ていたところですが、まず、その報告に当たって、先に結論を言ってしまうという。結論と言っているのかどうかもわかりませんが、現在の日本の状況というのは、ダイバーシティの中におけるコンフュージョンといいますか、多様化の中での混乱に陥って、いわば入学者選抜がきちんと機能していないというのが、実は私の、この間、多少入学者選抜に関して検討を加えてきたものの結論でございます。

ここにおられる日本の方たちにとっては余りにも当然に聞こえるかもしれませんが、極めてホモジーニアスな志願者がいて、その中で極めてシンプルな学力選抜、アカデミック・アチーブメントを通しての入学者選抜というのが戦後ずっと行われてきた。言い方を変えれば、もっとその以前、戦前もまたそのような形態があったわけですが、それがこの20年間に非常に大きく変わった。我々が直面しているのは、その多様化した入学者選抜の状況を前にして、入ってくる大学入学者の多様性、それと、その入学者自身の質的保証の問題と、入学者選抜というシステムそのものの質的保証、その両方に実は向かい合っているんだということが、私が報告として申し上げたいことです。

ですから、ここで終わっても構わないんですけれども、これをもう少し、何か参考な資料があったほうがいいだろうということで、あと30分ほど話を続けたいと思います。

4つの側面についてお話をしたいと思っています。一つは、日本におけるカレッジ・アドミッションの移り変わりですね。大学入試選抜の移り変わりという問題。それから、この20年ほどの間に入学者が非常に大きくその性格を変えてきたという多様化の問題。それから、きょうも文科省のほうから多くの方に来ていただいておりますけれども、政府あるいは文部科学省の政策の対応というのはどういう有効性を持っていたのかという問題。そ

れから最後に、これも3番目の問題と大変絡みますけれども、日本の入学者選抜が非常に混乱をしている、あるいは、その多様性の中にいるという以上に、実は日本の学校制度というものの自体が、もしかすると賞味期限切れといたしますか、非常に制度的な限界近くにいるのではないかとということを申し上げて、話をまとめたいというふうに思っています。

これは、これもまた皆さん周知のことですけれども、入学者選抜がどういうふうに変わってきたかというのを、60年代からこれまでを大きく3つに区分してみました。

そういたしますと、60年代から80年代という時代は受験競争が非常に加熱していた時代。それ以前もまたそうであったわけですが、このための解決策といたしますか、いろいろな試みがなされましたけれども、大学・短大の収容力を拡大していくということが、これに対して非常に大きな効果を上げたんだろーと思えます。

それから、80年代から90年代というところに来て、いよいよ拡大された収容力、その結果として大学も大衆化するし、実は入学者選抜というそのものが大衆化をしていくという時代を迎えるわけですね。大変象徴的であったのが、80年代における学力試験に対する国民的な反発といたしますか、具体的には共通一次試験という、非常にフレームとしてはきちりした、信頼性の高い共通試験制度をつくったわけですが、これで生じた序列化であるとか、あるいは輪切りという、学力によって学生たちが輪切りにされていく、あるいは選択がすべて学力の評価でもって決まっていくということに対して、大変大きな反発があった。このことによって、入学者選抜というのが、非常にシンプル、単純であったシステムから、非常にダイバース化へというんですかね、さまざまな方法がとられるようになったということがあります。これについてはまた後で触れる機会があるかと思えますけれども、この80年代の後期から特に90年代にかけて、日本の入学者選抜の性格というのがマクロ的に見れば非常に大きな変化を遂げたという時代になります。

2000年以降は、その変化を遂げた入学者選抜の結果を我々は受けとめなければいけない時代に入った。それが今度は、大学生の学力低下の問題であったり、あるいは入学者の質的保証の問題ということになってまいります。したがって、具体的な政策課題としての表現としては、高校と大学との接続をどういうふう to 実現するのか、スムーズなアーティキュレーションをどういうふう to 実現するのかということに政策的な目標がシフトしてきたというのが、非常に大ざっぱではありますが、この間の変化というふうに申し上げます。

2番目に、大学入学者が変わってきた、あるいは入学者が多様化したというふうに言えますけれども、それは具体的には、どういう変化を指して我々は問題を理解しているのかということで、3つのデータをご紹介したいと思います。1つは、極めてプレッシャーの高い受験競争、コンペティションが急速に減圧されていく。競争のリラクゼーションといたしますか、そういう変化が起きたと。それから2番目に、実は大学が大衆化する前に高校教育が多様化を遂げているわけですが、高校教育自体が非常にカリキュラムの中で変化を起こした。それから3番目に、入学者選抜の方法が変わった。これは先ほどから申

し上げている、学力テスト1本で、いわば入学者選抜が片付いてしまうという単純な方法ではなくなってきたという部分であります。

受験競争の緩和というのは、どういう変化であったのかというのを、3つのデータをここに挙げてみました。

先ほどジョンの報告の中でも、日本では人口が非常に減ってきたという話をしてもらいましたけれども、92年に205万人いた18歳人口が、2009年の今年は121万人に減っている。この間、実は40%以上に及ぶ減少が起きたということになります。

それから、大学・短大の収容力というのはどのくらい増加したのか。これは、90年のデータで見ると、志願した人の63%が大学・短大に入れた。大体戦後、60%から70%の間で基本的に推移してきたんですが、それが2009年には92%の収容力に変化をした。

それからもう一つ、肝心のといいますか、一番多くの指標に使われます18歳の年齢人口の中で、どれだけの人が大学・短大に入学するのかという、その進学率ですけれども、これも、この20年、90年を基準にいたしますと、36%であった進学率が56%にふえたという状況です。先ほどケントの話の中で100%という話が出てしまいましたので、ちっとも驚かないというような数字ではありますけれども、これは、日本の教育の現状にとりましては大変刺激的な変化が起きたということになります。

グラフで見ていただきますと、戦後過程が、このブルーに背景がなっているところですが、大学・短大への進学率は、この75年から85年の間、政策的に抑制された期間がありますけれども、その後また同じように進学率が伸びてきているというのが具体的なグラフとして示した変化です。このブルーのほうのグラフは、高校への進学率がどういうふうに伸びてきたのか。大体75年からフラットの状態に変わってきたという話です。

これは大変見にくい図で申しわけありませんが、18歳年齢人口というのが、日本におけるデモグラフィックな変化がどういうふうに影響してきたのかということをご覧いただきます。この棒グラフの部分が18歳人口の変化なわけですけれども、ちょうど急速に18歳人口が減っていくのに対して、こちらのほうが収容力ですね。志願者に対してどれだけの人が大学に入っていけるかというのが、ほぼ直線的に伸びてきました。これが既に9割を超えているというのが今の時点での状況ということになります。

それから、このブルーのほうで囲ってありますが、先ほど申しあげました大学・短大への進学率がどういうふうに伸びてきたのか。ここで一旦鈍化して見えますけれども、またこれが増えてきて、16年でデータがとまっていますけれども、21年現在だと、これが56%ぐらいまで伸びてきているということになります。

2番目に、そもそも入ってくる学生たちが増えたという話は今申しあげた内容なわけですが、高校教育自体が変わってきたということで、一つのデータをお示ししたいというふうに思います。具体的には、94年のナショナル・カリキュラム、日本における学習指導要領というものの変化で、履修科目の種類が大変増えました。これまでは2単位科目というものはなかったわけですが、その2単位科目というのが入り込んできて大変

科目数が増える。それからさらに、それを選択する選択性も広がったというところがあります。

この結果、実はこれは、英文で書いたほうも、ここは変えてごさいませんが、これだけの高校で学ぶ、普通科ですけれども、アカデミックコースですね。普通科目がこれだけ並んでいますけれども、この基本科目のところは——最初に、この指標のとり方を申し上げておかなければいけません。購入された教科書数を生徒数で割ったという非常に単純な推計値を示したものですけれども——100%を超えているものがありますが、これは生徒以外に購入されているという分量をあらわしているようなところもありますが、現代文であるとか数学だとか英語だとかというのは、ほとんどの学生が履修をしているということになります。しかし、大学の理系でもって必要とされている物理の例えばⅡというのは全生徒数の12%しか物理Ⅱの教科書は買っていないという状況ですね。それから、数学Ⅲというのは、英語で何て言うか忘れちゃったけれども、微分積分が入っている科目ですけれども、19%の人がその教科書を買っています。履修しているかどうかわかりませんが、教科書を買っているのが19%です。確率統計が入っている数学Cのほうは18%が履修しているにすぎない。生物Ⅱに至っては14%だというような状況にあります。

これが、選択がふえて高校教育が多様化したというふうに言ったときに、一体何が多様化したのか。生徒個人でもって履修するばらつきが非常に大きくなったというのが、こうしたことの反映として見られます。

それから3番目に、日本における入学者選抜の多様化というのは、この20年間、非常に大きく変わった。

先ほど、ケントの話の中にマルチプラクティスの話がありましたが、あれを実は単語としてどうやって英語に直そうかと思って迷っていたんですけれども、推薦入試というのを僕はノミネーテッド・アドミッションか何かに訳したかと思います。ケントのですと、ここがリコメンデーション——リコメンデーション・アドミッションでしたっけ——というふうに言っていたと思いますし、それから、日本でいうアドミッション・オフィス入試というふうに言われるものは、ポートフォリオ入試というような言い方ができるのかもしれませんが、学科試験以外の方法でカレッジ・アドミッションを実施するという割合が大変に増えてきたということがあります。実は学科試験そのものも、科目数というのは著しく減ったということがあります。

恐らくこれは後で、カリフォルニア大学、ジョンのお話なんかとの関連で、なぜこういうような、いわば入試科目の削減だとか推薦入試というのがこんなに急激に起こるのかという疑問が出てくるだろうと思うんですが、それは、ジョンが出したデータでは、8割がパブリック・ユニバーシティーですね、アメリカでは。でも、日本は8割が私立大学である。私立大学は学生がその基準に達していなくても、学生を受け入れていかなければ経営が成り立たないという特色があります。そのことが実は80年代終わりからの入学者選抜の変化というものを非常に加速したということが考えられます。

これは、今申し上げたことの一つのデータですけれども、これは2008年のデータが、既に2009年のデータもあります。このグラフは4年制大学に入ってくる入学者の数が縦軸にとってあります。いわゆるリコメンデーションによるカレッジ・アドミッションというもので、今、23万人ぐらいの人が入学してきます。ですから、この98年から2008年まで、その11年間、ほぼ60万人という水準で大学入学者というのが推移してきたということがわかります。これは、あれだけデモグラフィックな変化があったにもかかわらず、大学に入る人の数はそんなに変わってこなかったということにもなります。

いずれにしても、このブルーといいますか紫色の部分がエントランス・イグザミネーション、入試を経て入ってくる人たちですね。それ以外の、インタビューであるとか、ポートフォリオであるとか、あるいはノミネートされて入ってくるという部分が45%ほどに達しているというのが現状です。45に対して55ぐらいの比率に変わってきた。このことが、実は以前はほとんどが入試、エントランス・イグザミネーションで入ってきた部分に対して、これだけの要するに多様な入試がその中に入り込んできたというふうに言っているかと思えます。

3番目のトピックですけれども、今起きたような変化に対して、政府は、あるいは文部科学省は、どういうふうな努力をされたのかということで、代表的なものだけちょっと挙げてみました。検討中のものもちろんあります。

恐らく大変に関連があるだろうと思うのは、学生の学力低下というものが、初中等段階の教育にどういうふうな、逆ですか、初中等段階での変化というものがそこに持ち込まれているのかどうか。その基礎教育のレベルを調べようというので、全国学力調査が3年前から始まったということがあります。これはもう悉皆で行われていますので、小学校6年生と中学3年生、数にしますと、それぞれ大体120万人相当ですから240万人の試験が、この3年間、毎年行われてきたということになります。

それから、その全国学力調査だけでなく、地方自治体もまた学力調査を熱心を実施するようになった。2003年は一つのピークだったと思いますが、44の都道府県と12の政令指定都市でもって行われたという実態があります。この後、実は都道府県のほうは、全国学力調査が続くならば自分のところは撤収するというか、やめるという自治体も出てきておりますけれども、2003年はこれだけの数の自治体が学力調査をやるということを行った。やるという自治体のございました。

3番目に、学習指導要領ですね。アメリカでいうとエデュケーション・スタンダードということになるんですが、学習指導要領というのを少し緩め過ぎたといえますか、その知識量をもっと、学習内容、コンテンツをもっとふやすという方向で改訂が行われまして、この告示が昨年12月でしたでしょうか。昨年、学習指導要領の告示がなされたということがあります。この実施は3年後になりますか、3年後から行われることになります。

それからもう一つは、高校教育と大学教育というものがどうもスムーズにつながっていないので、予期していないような多様性といえますか、質的な多様性が生まれているとい

うことで、高校と大学をつなぐための新しいテストが中央教育審議会のほうで提言されたということがあります。

もう一つは、入り口の多様化によって、実は大学教育が非常にダメージをこうむっていると。大学教育の質的な保証を行うために、PISAの高等教育版への参加であるとか、アメリカで行われている大学のイグジット・イグザムに参加するというふうなことも、検討が進められているということがございます。

上の3つは、実際にこれが進んできたわけですけども、その下の④と⑤につきましては、現在検討が進んでいるというふうに申し上げることになります。

果たしてこのような政策的な対応というのが的を射ているのかどうかというのに、個人的な見解で申し上げますと、多少違和感があるということがあります。

そのコンテンツを増やす、あるいはテストを導入するということで、今生じてきている多様性、日本では、先ほどジョンやケントが言っていた多様性と大分意味合いが、意味するところが違うんだらうと思うんですね。学力における多様性、いわば学力の上位から下位までのレンジが非常に広がってきたということを通常の場合に多様性というふうに言ってきた部分が多分にありまして、地域なり、あるいはソーシャル・エコノミックな指標で見るところの分布をどういうふうにカレッジ・アドミッションに反映させるかというような発想で、日本では必ずしも多様性ということ語られてこなかったという部分があります。

ですから、私の話も極めて学力にかかわっての話になっているかと思えますけれども、ここで、実は日本の学校教育、あるいは大学での進学段階で、かなり危機的な状況になっているのは、満身に教育課程の積み上げができなくなっているということ、それから、そもそも教育課程の積み上げ自体を前提としている学校制度自体に、実は問題が生じてきているのではないかというのが、政策的な対応に対する私の違和感でもあります。

これは、ジョンのいる前で言うのはちょっと恥ずかしいところはありますけれども、教育テストによる学力向上策というのが本当に有効なのかというところで、アメリカの経験に即して見たときにどうなんだろう。後でデータをお示ししますが、アメリカでSATの得点が急速に降下したということがあります。それが変化してくるときには日本にも情報が伝わってくるんですけども、その得点が下がった、学力低下が言われた後、どうなったのかという話は、実は余り議論されていないということがあります。実は、私が見るところ、SATの成績はそれほどは、その後の努力にもかかわらず、上がっているというふうには見えません。90年代のアメリカの初中等教育の改革というのは、これは日本でもいろいろ議論されましたけれども、各州で教育スタンダードをつくるか、あるいはスクール・ディストリクトごとにスタンダードをつくるというふうな努力もされましたし、それから、ステートごとに統一的な進級テストが行われるという努力もされました。ただ、こういうものがそれほど有効に機能したのかということで見ると、アメリカの経験から見ると、実はさほどではないのではないかという感じがいたします。

だとすると、日本でこれから行おうとしているテストというのが、あるいはテストの導入というのは、どれほど意味があるかということも、またそこから示唆される部分があるんだろうと思います。

先ほど言いました、学校システム、学校制度そのものに揺らぎがきているのではないかということについてはこの表をご覧ください。これは約50年の間に日本の学校システムというのがピラミッド型から非常に長方形に近い形に変わってきたことを示しているものです。1960年と2009年ですけれども、高校にはほぼ全員の人が、すなわち年齢人口のほぼ全員が進学をしていく。大学・短大に6割弱の人が行くようになった。それから、専門学校、スペシャルトレーニングスクールというようなどころには20%を超える人たちがまた行くという状況ですね。これはさらに、この高等教育の部分は拡大傾向を示しておりますので、より長方形に近い形での学校システムになっていくだろうと思います。

ただ、問題なのは、我々が持っているノウハウというのは、実はピラミッド型の時代のものであって、長方形のシステムを支えるようなノウハウを持っているわけではないだろう。もし学校制度、学校システムというものが長方形になるのだとしたら、どうしたらいいのか。実は、図柄をかきますと、小学校の上に中学校の教育課程が積み上がり、その上に高校の教育課程が積み上がり、さらに大学・短大の教育課程が積み上がるというふうに、この絵はなっている。政策的な対応もこれを前提としているんだろうと思いますけれども、実際には小学校のことを十分に習得していない大学生がたくさんいることはご存じのとおりです。ですから、この図は、日本に「絵にかいたもち」という表現がありますけれども、絵にかいたもちであって、実態としての学校システムはこれとは全然違います。

これは文科省のほうでやった調査がもとになっていたと思いますけれども、小学校で授業が理解できているのは7割だ、中学校で授業のことがわかるのが5割だ、高校にいくと、その3割の人が高校教育の授業がわかる。そうすると、高校の教育のことがわかる3割の上に、実は8割近い高等教育進学者がのっかっているという話になります。このことは、こうしたアンバランスというものを、学校システムの中で、あるいは教育システムの中で、どういうふうに維持していくのか、あるいは、その中で目標をどういうふうに達成していくのかというのが問われているのだろうと。

これは、ご存じの、といいますか、アメリカのSATの得点が1963年から80年にかけて急速に落ちていったグラフですけれども、バーバルのほうの実線のほうで、点線のほうがマスマティックスのほうのデータということになります。

これは83年で切れていますが、この後のグラフが、ETSのほうで出しているデータで見ますと、これは72年からはなりますけれども、98年までのデータがあります。ごらんのように、多少のこぼこはありますが、バーバルに関しては、落ちた学力は戻ってはいけません。ですから、それが先ほどの90年代のさまざまな初中等教育の結果としても、大学入学テストであれ、SATの成績としては上がっているわけではない。ただ、数学に関しては、一度底をついてから、ここまでの回復傾向はありますけれども、70年代

の前半のところに戻ってきたというところであり、そのもとのところに戻っているわけではありません。ですから、そのテストだとか、あるいは教育改革の効果というのは、かなり限定されたものだというのを一つは示しているんだろうと思います。

学校システムそのものが実は、どうも制度的に賞味期限にきているのではないかということは、それに当たるものをちょっと入学者選抜にかかわるものとして挙げてみました。

一つは、先ほどから言っていますように、大学教育の正規課程にそのままついていけるような準備がない学生、進学準備が不足している学生が大学に入れるようになった。高校卒業未満の学生というふうに、その大学生と呼ばれる人たちです。

それからもう一つ、大学に入ってから大学をやめていく人たちがふえている。これは大変、官庁のデータから推定するのが難しいデータなんですけれども、大学に入った後、かなり容易にやめていく人たちが増えてきました。

それから、先ほど高校には97%、ほぼ全員が高校等の後期中等教育に進学をしていくというふうに言いました。しかしながら、高校を3年で卒業する人たちというのは88%しかない。97%の人が入って88%の人が卒業していくということだと、途中でドロップアウトする人たちが、今、121万人の人たちの18歳人口で見ますと、大体10万人ぐらいが高校でドロップアウトするということが起きています。

それから、この間に非常に増えてきたのが、大学に入学する人たちの中で、外国の学校を卒業して大学に入ってくる人たちが増えています。このこと自体をどう評価するかというのは大変難しいのですけれども、入学者の均質性という点では、かなり異質なルートを通ってくる人たちが増えてきたということがあります。

それから、繰り返しになりますけれども、入学者選抜の方式そのものが非常に多様化し、また複雑化をしてきたということ。

最後に、我々が自信を持っているセンター試験について言えば、このセンター試験もある種の揺らぎといいますか、揺さぶられている部分があるということをお話しする必要がありますのだろうと思います。

現在、大学・短大を志願する人たちというのは74万人います。この中で大学・短大へ入学する人たちは69万人になります。その間で落ちる人たちというのは、実は5万人しかいないわけですね。それが90%を超える収容力ということになるわけですけれども、この志願者に対して、この入学者数で、センター試験、ナショナルテストを受ける人たちというのは51万人なわけで、入学者のほうのデータで見ますと、入学試験を受けて入ってくる人たちは35万人いる。それ以外の入学試験を課さない入試で入ってくる人たちは、また34万人だ。これは、大学・短大合わせてですけれども、その数になるわけですね。センター試験を受けながらも、実はこちらのほうのルートで入学してくる人もいれば、このグループに入る人たちもいる。さまざまな人たちがセンター試験を受けているという現状があります。これは従来、センター試験を受けるということは、入学試験を受けて、それでもって大学に入ってくるということを前提としていたわけですけれども、必ずしもセンター試験

の結果を使って大学に入るということを前提としない、そういう人たちが51万人の中に相当数含まれているということを示唆するデータでもあります。

学校システムそのものが、実はそれだけの量の生徒数を支える構造には、無理がもうきているのではないかという話が一方であって、実は、センター試験もまたそういう挑戦を受けているという状況が否定できない状況であるかと思います。

私の話はここまでで終わりますけれども、高校教育も多様化をした。入学者選抜も多様化してきている。この中で、センター試験の受験者もまた多様化しているということは当然のことと考えなければいけない。それから、大学教育も多様化をしている。こういう3つの、いわば大きな多様化という変化の中で、入学者の質的保証をどのように実現するかということ、これを問われているということになるかと思います。

アメリカや台湾の話聞いていますと、そこでのやっぱり多様化というのは非常にポリティカルな要素を含んでおりますけれども、幸か不幸か、日本での多様性というのはかなり能力的なもの、学力的なものにかなり特化したものとしてそれが考えられているわけです。恐らくそういう多様性そのものをどう考えていくかというのが、今日の前の2つの報告も含めて、我々の前に突きつけられているのだろうというふうに思います。

以上です。(拍手)

田中教授(司会)

荒井先生、ありがとうございます。

コメント、ございますでしょうか。いかがでございましょうか。

それでは、最後にディスカッションの時間もございますので、そのときに、ディスカッションといたしますか、ご質問いただく時間もとれるかと思います。

入学者選抜の課題 —多様化の中での質的保証—

荒井克弘(大学入試センター)

論点 : 多様化による混乱

- ▶ 均質な大学志願者、単純な入学者選抜がこの20年間に大きく変わった。
- ▶ “多様な大学進学者の為の入学者選抜の在りかたとその質的保証“

- ▶ 1 入学者選抜の変遷
- ▶ 2 大学入学者の多様化
- ▶ 3 教育政策の対応とその有効性
- ▶ 4 教育基盤の揺らぎ

1 入学者選抜の課題の変遷

- ▶ 1960～80年代
 - ▶ 受験競争の過熱
 - 大学短大の収容力の拡大 → 進学機会の増大
- ▶ 1980～90年代
 - ▶ 大学入学者選抜の大衆化
 - 学力偏重に対する国民的反発 → 入学者選抜方法の多様化
- ▶ 2000年以降
 - ▶ 大学生の学力低下問題
 - 少子化の下での受験競争の緩和 → 高校と大学との接続の改善

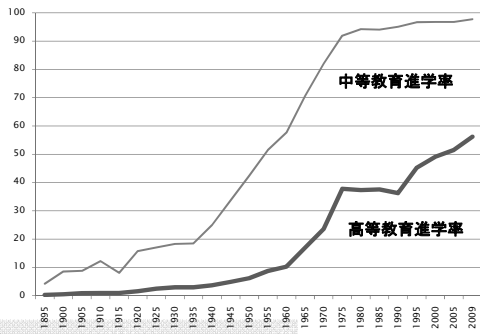
2 大学入学者の多様化

- ▶ (1) 受験競争の緩和
- ▶ (2) 高校教育の多様化
- ▶ (3) 入学者選抜の多様化

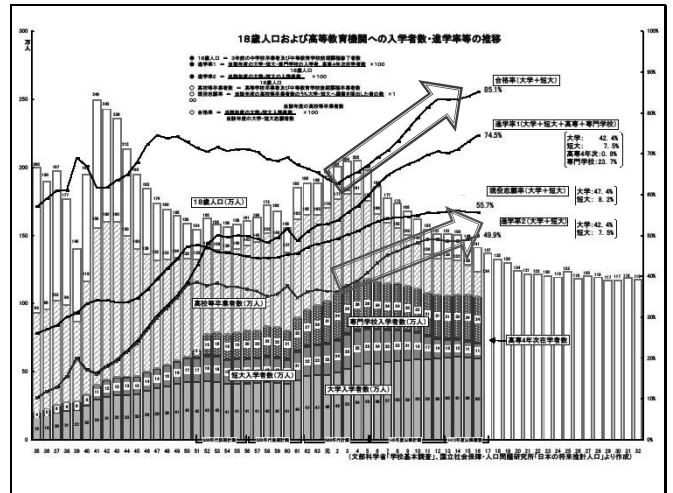
(1) 受験競争の緩和

- ▶ 18歳人口の急減
 - ▶ 205万人(1992) → 121万人(2009)
- ▶ 大学・短大収容率の増加
 - ▶ 63%(1990) → 92%(2009)
 - ▶ 収容率: 当該年度の大学・短大入学者数 / 当該年度の大学短大志願者数
- ▶ 大学・短大への進学率
 - ▶ 36%(1990) → 56%(2009)
 - ▶ 進学率: 当該年度の大学・短大入学者数 / 18歳人口

高校(後期中等教育)進学率と 大学・短大(高等教育)進学率の推移



7



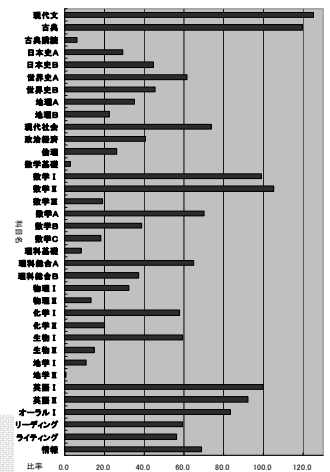
(2) 高校教育の多様化

- ▶ カリキュラムの多様化(1994～)
- ▶ 履修科目の種類が増え、選択科目の幅が広がった。
- ▶ 結果として、大学入試に直結した履修科目の選択が強化された。

科目履修率

(教科書購入数/生徒数)

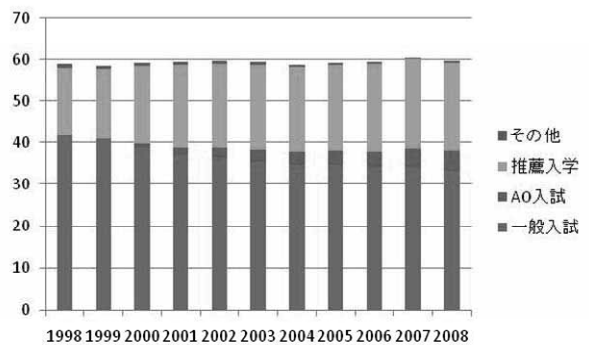
- ▶ 必修科目の未履修
- ▶ 物理Ⅱは12%
- ▶ 数学Ⅲは19%、
- ▶ 数学Cは18%
- ▶ 生物Ⅱは14%
- ▶ (data; 2007)



(3) 入学者選抜の多様化

- ▶ 入学試験の科目削減
- ▶ 推薦入試・AO入試の増加
- ▶ 私立大学における経営主義の台頭(学生募集)

非学力選抜方式による大学入学者



12

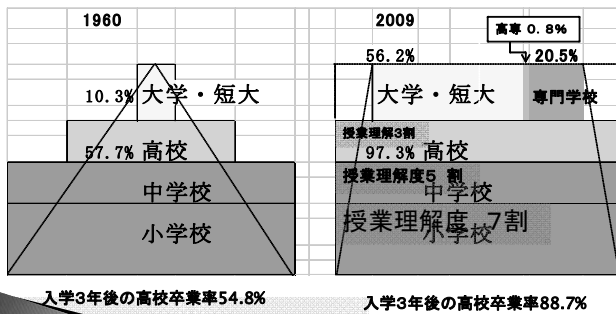
3 教育政策の対応とその有効性

- ▶ ①全国学力調査の再開(2007～),
- ▶ 小学6年、中学3年対象、国語と算数(数学)
- ▶ ②地方自治体が実施する学力調査も増加
- ▶ 2003年には56自治体(44都道府県12指定都市)
- ▶ ③学習指導要領の改訂(08)
- ▶ ゆとり教育の揺り戻し、学習内容の増量化
- ▶ ④中央教育審議会による「高大接続テスト」の提言(08)
- ▶ 高校教育の質的保証
- ▶ ⑤大学出口試験の導入を検討
- ▶ PISA高等教育版への参加を検討

政策的な対応と教育実態とのズレ

- ▶ 学校システムの変貌
- ▶ 学年、学校段階間での教育課程の積み上げが困難になっている。
- ▶ 進学フローと学校制度の間にかい離が生じている。
- ▶ 教育テストによる学力向上策は有効か
- ▶ SATにみるアメリカの経験
- ▶ アメリカの初中等教育改革(1990s)
- ▶ 教育スタンダードの開発、州統一の進級テストの導入
- ▶
- ▶

学校システムの変容



SATの得点降下

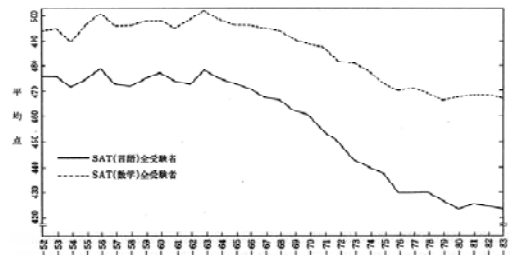
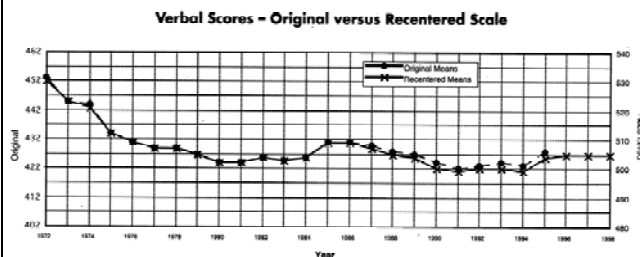
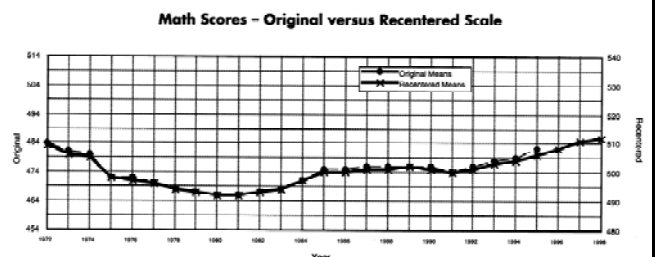


図 6-1 等化平均値による SAT の経年変化
(Dunkle, T. F. (Ed.). *The College Board Technical Handbook for the Scholastic Aptitude Test and Achievement Test*. College Entrance Examination Board, 1994, p.7)

1972-1998年以降のSAT得点 (言語領域)



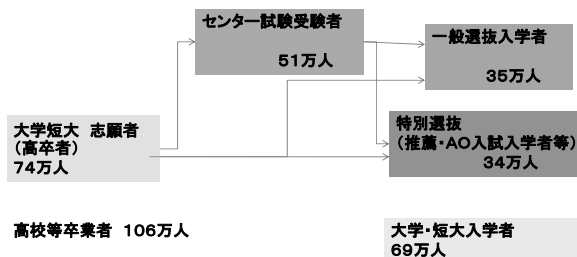
1972-1998年のSAT得点 (数学領域)



4 教育基盤の揺らぎ

- ▶ 進学準備不足な大学入学者
- ▶ 進路意識が未熟な大学進学者
- ▶ 高校中退者、留年者の漸増
- ▶ 外国の学校卒の大学入学者の増加
- ▶ 入学者選抜の多様化、複雑化

センター試験受験者も多様に



20

大学入学者選抜の課題

- ▶ 3つの多様化(高校教育、入学者選抜、大学教育)の中で、入学者の質的保証をどのように実現するか？

▶

指定討論

Deane Neubauer

(イースト・ウエストセンター・グローバルゼーション研究センター所長)

田中教授(司会)

ここでヌーバウアー先生のほうから、日本語では指定討論者になって、いわゆるディスカッサントでございますので、今回のお三人の方々の要点をまとめていただきながら、課題、論点を見つけていただくということに入りたいと思います。

実は、ちょっとこれは若干お断りですけれども、課題のところで日本名は「大学入学者選抜」と、こうなっておりますけれども、実は英文のほうで考えておりますトピックというのは、それがぴったりそう日本語でなっているかどうか微妙ですけれども、「Choosing College Students」というのが一つのテーマでございまして、その中にアクセスとエクイティー、クオリティーという問題が出てきます。

そういったことを踏まえての論点かと思っておりますので、どうぞお願いをいたしたいと思えます。

ヌーバウアー教授

まず、この会議の準備をしてくださって、このようにまたお招きくださった方々にお礼を申し上げたいと思います。こうしてまた同僚たちともめぐり会うことができましたし。

それで、きょう話題に出たことについて、幾つか大事な点を指摘しておきたいと思えます。

私に与えられました役目は、この3つの発表の中に深く入りまして、それに共通するテーマですとか、その底流を流れる問題をつかむように。そのことについて、これから、何ですって、4時間半じゃないですよ、30分じゃなくて45分、時間をいただいておりますので、お話ししましょう。

発表いただいたペーパーから、幾つか要点を抽出したいと思います。

これはジョン・ダグラスさんが強調されたことですが、アドミッション・ポリシーというのは複数の政治的な目標に使えるというか、その役に立つというか、かなうものであるものだ。これを見逃しやすいのですけれども、私、加えて強調したいと思います。アドミッション・ポリシーの決め手となるには、複数の、さまざまな要素があるんです。

その変化を促すには2つの力学的要因があると。

ジョンはこれも強調していましたが、アドミッション・ポリシーの変化はだんだんと、ゆっくりと、漸次的に進むものであると。それは、社会の経済的、社会的構成のあり方を反映したものになると。

また、ジョンはこんなことも強調していましたが、こういう言い方をするのは初めてで、皆さんも初めて聞いたんだと思いますが、ポリシーが突然変わったり、あるいは一時的な

変化に合わせて変わったりするとシステム全体が混乱に陥る。言ってみればノイズを生み出すにすぎなくなると言っていましたね。

ここにおいでになる皆様のほとんどは、私たちが、あのすばらしいシステムを備えた社会、日本と呼んでいる社会においでのことと思います。

少なくとも私たちのうちの2人は、あの混沌とした社会、アメリカと呼ばれるところに住んでいますけれども、アメリカでの生涯のある現実の一つですけれども、あるとき気がつくのです。アドミッション・ポリシー、入学者選抜制度が実際に見てみると余りにも複雑になっているために、いざ大学に志願しようとするとならぐ大変だ。それで、私はある提案をしたいと思う。複数の層にわたって、さまざまな層でアドミッション・ポリシーを考えてみるということ提案したい。

その一つが、大学あるいは政府の官僚組織がどのようにアドミッション・ポリシーを理解しているかということ、この一つの層としてとらえておくことです。もうすぐ実際どうするかという実例を示してお話ししますが、入学者選抜制度というのは実にはっきりしないで、とらえどころのない、わかりにくいものであることが多いです。

つい最近、連邦議会は、合衆国の大学に関するある新しい法を、オバマ政府になってから、ついこの間、通過させたばかりです。

オバマさんは今どの辺にいるんだか知りませんがね。そんなふうに気軽に言いますのも、オバマさんはハワイでうちの近所のホンボイというところから、もう本当にすぐ近所出身だからです。

立法府がオバマさんの指導のもと、何を大事にしたかということ、家族、家庭で経済状況を、連邦政府の支援を受けるためだけではなくて、大学からも支援を受けるために、その経済状況を申し立てるプロセスを単純化するということです。アメリカだけではなくて、世界中のさまざまな国で、経済状況がアドミッション・ポリシーの大きな部分を占めるようになってきています。

ついこの間のニューヨークタイムズの日曜版には、58ものアメリカの大学の1年の費用が5万ドル以上かかる。それは何かうわさも入っている。ミシシッピー川の東側の大学ばかりなんですけれども、9つの大学が学費だけで、やっぱり5万ドル以上がかかります。

言いたいことは単純なんです。社会科学的な観点から見ると、アドミッション・ポリシーで使われている言葉、文言はややこし過ぎる。これは、ジョンがさっき言ったことを下支えしたいと思っただけのことなんです。アドミッション・ポリシーを複雑ではなくてできるだけ単純に、シンプルに保っておけばおほくほど、あれだけの大学に合格できる人の数を最大にとっておける。最大に維持できる。その応募者の人数が減ってくるというのが心配だったらの話ですけれども。

ジョンは、アドミッション・ポリシーというのは政治的な側面もあると言って、カリフォルニア大学の場合を話してくれましたけれども、これは非常にうまくいっている。プロセスとしてもうまくいっている例ですけれども、私はちょっと別の強調の仕方をしたいと

思う。アドミッション・ポリシーは政治的な面もあるんじゃないかと、常に政治的なんです。

常に政治的であるというのはどういうことかという、公衆善、公益という言葉に常に、最大の公益善ということを常に頭に置いておくことです。例えば、そのことを忘れてしまうと、このことを変えるとこんなにこのグループに、これだけの大きなグループに影響が出る。しかし、その変化は、こちらにしておけば、その影響を受けるグループは小さくとどめておくことができると。このことを忘れる国が多いのですね。次から次へと、いろんな国でこのことを忘れていきます。

それから、ジョンはとても大事な点を挙げましたね。入試がその後の学業での成功を予測するか。UCではそうじゃなかったのですね。GPAのほうが予測になっていた。そうでないなら、じゃあ何でと聞きたいのですけれども、ほかの方のお話を聞いたことをまとめて、ちょっと違う言い方をしようと思います。

ケントが話した例で、先生が自分の学校の卒業生を大学へ入れたいもんだからと成績をインフレさせたという、あの話。ここで大事なものは、そのシステムの中に属する機関における尺度と多様性という2つのことです。

GPAがなぜUCでは比較的よい予測の指標になるのかという、その母集団が大きいからなんです。これは、方法論の話になりますけれども、この母集団が大きければ大きいほど少ない努力をもって正しい結果が得られるということになる。

これは世界中、いろいろなところで、一流の高等教育機関というのは、小さいところと、それから規模を拡大し続けているところがありますよね。この2つの集団に対して、タイプに対して、アドミッションという言葉を使う、入学者選抜という言葉を使うと、まるで違うことを指すことになる。

ジョンが指摘したのはもう一つ、こちらのほうが大きな問題なのでしょうけれども、入試が入学後の学業での成功を予測できないのであれば、なぜできないのだろう。このほうが調査可能な問題ですよ。きっと答えは文化や国によって違うのでしょう。

それからジョンは、カリフォルニア大学での社会的契約という面について問題を指摘したけれども、それを聞いて私は、すべての公教育機関が社会的契約を持つべきなのか、どうだろうかという問題を思い浮かべていました。考えていた問いは2つあって、1つは、社会契約という言葉は国やそれぞれの社会によってどんな意味の違いがあるのだろうかということです。社会契約という言葉は、これは、アメリカはアメリカ国民が経験した政治的・哲学的経験に基づき、哲学あるいは社会におけるリベラリズムということに裏打ちされています。

ここで、私の同僚であるジョン・ホーキンスの考えをもとに話したいのですけれども、彼は、日本・中国の高等教育システムの専門家として、社会契約といっても、教育、特に高等教育、アジアにおける高等教育で社会契約といったら、これは近代化の影響を受けてもいるけれども、まだ今日生きている、また別の見方があると言っているんです。政治的という言葉を使ったからといって、何か悪いことを指しているわけじゃないんですよ。

このアジア、中国・日本・韓国における健やかな政治性、政治的文脈の中で、教育における社会契約という考えを健やかに政治的に扱うには、教育における社会契約という考えが、この項目が常に政治的な対話の中に組み込まれていなくてはならないと思うのです。そして、常に既に起きている変化を認めなくてはならないと思います。これは、ケントが既に台湾の例を話してくれましたけれども、私は、これをさらにシンガポールとかマレーシアとか、混乱とか伝統との何やらなんていう、何か変化や現象が表面化しているところでは、高等教育における社会契約ということを考えなくてはならない時期だと思っています。

ケントはもう一つ、質ということを強調していたけれども、話の初めでは、大学入試の質というふうに言っていたけれども、話していくうちに、大学入試が影響を与える大学での教育そのものの質というふうに話が展開していききましたね。

ここで皆さんとひとつ考えたいのは、アメリカ的な物の言い方で言えば、ディコンストラクション、脱構築ということと、その地域における人口構成の変化です。

データがありますので、後でお目にかけることもできますけれども、このアジア太平洋地域では3種類の高等教育機関が存在しています。それを特徴づける要素が3つありまして、出生率の低下、高齢化社会、それから18歳、24歳人口の減少。でも、アジアでも南西部という社会の成り立ちが大分変わっていて、まだ出生率もうんと高いですね。今後25年についてのユネスコのデータを見ると、全体としては出生率は下がっていくようなことを言っているけれども、高いところと低いところを比べ、例えばマレーシアと韓国などだと、その差は2%にもなる。これは巨大な数字です。3つ目は、中国やインドのように、国としては急速な発展を遂げているが、すぐに高齢化を迎える社会。高等教育に関して人口構成の点から見ると、このように3つの異なる社会があることになる。

ケントはもう既に十分言ったけれども、あえて強調するとすれば、高等教育の収容能力は、この3つの社会で全く違うことを意味することになる。何か学校の先生みたいにしゃべっていますけれども、収容力という言葉を使っても、この3つの社会の違いをわきまえずに話していると、もうまるで全然違う話になってしまいますよ。何の話をしているか、自分たちでわからなくなりますよ。人口構成については、もっともつと言いたいこともあるのだけれども、ケントがその大見出しを出してくれたことを大変よかったです。

もう一つ、皆さんにぜひこれから関心を持ってもらいたいと思うのは、国内の経済的なニーズという要素。後でグローバルイゼーションのところでも詳しく言うとして、1つだけ要点を言うとしたら、高等教育は経済成長に必須です。日本や韓国が世界にとってお手本になっていると思うのだけれども、高等教育は国内消費にとっても必須です。

先進諸国をごらんください。国内消費に何が大事かと思ったら、SESなんていうことを言いますが、ソーシャル・エコノミック・ステータスといって、社会経済的地位なんて言いますが、私はあえてSESのEを教育にして、社会教育的要素と言いたい

と思う。あまりこんなことは話題にのぼらないけれども、もう成熟した、既に発展した世界では、このことを話題にするのがますます大事になってきていると思います。

アメリカでは、さまざまな可動性の高いチャネルがさまざまにあるけれども、高卒か大卒かが、アメリカでは生涯賃金、生涯収入に大きな差をもたらします。大学卒の場合だと150万ドルも余分に収入を得ることになります。大学院へ行けば、この差はなおさら広がります。

アメリカなどを振り返って、こう言いたいのですけれども、成熟した産業社会では、経済は、国内消費を頼みにして経済生活あるいは健やかな生き方が可能になるのです。私が言おうとしてきたことは、全然違うかもしれないけれども、多分違ってないと思うのだけれども、教育と経済の関係です。この60年間、こうだと思ってきた教育と経済の関係はもう通用しなくなっている。変わってきている。経済といえば生産部門のように考えていた。生産と結びつけていたけれども、より消費と結びつけてとらえる時期にきている。

それから、ジョンとの話の関連でケントが言っていたけれども、いわゆるトップレベルの大学のこと。これは、台湾では世界レベルの大学であるかどうかというのがとても大事な問題だったようだけれども、答えから先に言わないように、まずシンプルに提案したいんだけど、高等教育にかかわっていると、これは実に危ない場所に立っているんです。

ちょっと変な話だけれども、例えば私をアーノルド・シュワルツネッガーと比べてみるとうまいでしょう。私が何者であれ、アーノルド・シュワルツネッガーではありません。アーノルド・シュワルツネッガーになろう、ならんとしたこともありません。なりかけたこともありません。

サイモン・マーチャンセンというオーストラリアの高等教育の専門家が、ランキングについて大変おもしろいことを言っています。問題は、ランキングには2つの要素がある。1つは時代的な要素と。その尺度は何か均等なものを当てはめているようなつもりになるけれども、全然そうではないと。例えば1番になるということは、その1番であること以上の何かを意味することになりますよね。このサイモンさんは、大学の歴史をすべて振り返ると、これは300年分にもなりますけれども、その大学がいかにして今の名声を得たのか、その歴史とか、大学が持っている資金ですとか、そういうものをただランキングだけであらわせるものではない。

例えば東大が20番だとうまいでしょう。ちょっと二、三週間前にちらっと持っていたんですけども、例えばペンシルベニア大学が19番だったとうまいでしょう。教育政策的には、2つのことを指します。ペンシルベニア大学と東大はとても似ている、そんなに差はない。もう一つは、東大がペンシルベニア大学を抜かしたいと思えば、ちょっと頑張ればいい。これは2つとも、サイモンさんによれば、ばかな考えだということです。

人を比べるとき、こんなふうに地球規模で比べ合う時代になりましたけれども、まず、私たちは、我々の学校を出る卒業生はどんな人であってほしいのかということを考えなくちゃいけない。比べるときには、一体何を比べているのか考えなくてはならない。

ケントの発表から、最後に1つだけ、質的保証のことだけ。

質の問題というのは、これはもう世界的な問題で、質の問題にかかわるには3つの段階があると思います。これは私もそうだったのだけれども、第1段階は高等教育機関の収容能力を計測している段階。第2段階は、卒業生の能力、力を、その卒業生が出した結果から評価している段階。3つ目の段階は、どこもこの段階に立ち入った国はまだないけれども、質的保証にかかわる人々にとって、この段階はますます大事だと思う。というのは、高等教育機関における質の意味は絶え間なく変わり続けているからです。

さっきは収容能力という言葉について、いろんな意味があるんだということを言ったけれども、質という言葉も、同じ言語でさえ、例えば同じ英語でさえ、5年、10年、15年前とは全然意味が違ってきているんです。特にアメリカとかヨーロッパでは、新しいテクニクを使って、絶え間なく変わりつつある、この非常に繊細な質ということを定義しつつ、質的保証をしようという取り組みが始まっています。

荒井先生の発表からは3つの点を抜き出しました。

まず、おっしゃっていたことで一番中心的な問いは、多様性を求めながら、同時に質を保証することができるのかという問いであったように思います。あるいは、この2つの事柄は逆に関連し合っているのかどうか。これは方法論としては、開かれた問いであると思います。

このダイバーシティー、多様化という言葉について荒井先生は、ちょうどさっき私が収容能力とか質について言ったことと同じようなことをおっしゃいましたよね。私たち3人が多様性と言いながら、実はちょっとずつ違うことを意味しているんじゃないかとおっしゃいました。だから、私たちのほうが、多様化、多様性という言葉で、違うことを意味しながらこの言葉を使い続けると、一体どういうコストが生じるのだろうかということを考えなくちゃいけませんね。

この問いに対する私の答えは「わからない」です。知ることもできません。それは、前もって何か行動を起こさないとわからないです。まず、この多様性とか質という言葉が現実の世界で一体何を意味するのか、現実的に特化してとらえた上で、これを、この2つを併存できるような構造をまず考えなくてはいいけない。

2つ目の点は、ケントも荒井先生もおっしゃっていたんだけど、グローバリゼーションがどうもこの多様化と関係あるのではないかと、あるいは多様化の中身、構成要素でもあるのではないかと。だとしたら、どうこのグローバリゼーションについて語り合い、それを描写し、説明し、理解し合ったらいいのだろうか。

これはこんがらがりがやすいので、はっきりさせておきたいのですけれども、多様性というのは、この世の中に空気みたいに存在しているものではありません。多様性とは、人間がみずからの行動を通して常につくり続けている、ある状況のことです。だとしたら、そのダイバーシティー、多様性ということを理解したら、それをテストすることが私たちにはできるのでしょうか。これが第2の問いです。

多様性がテストできるかどうかについて、ちょっとこれまた変なことを言うことになりませんが、ここにいる皆さんは、ほとんど皆さん、テスト関係のお仕事をしていらっしゃるんですよね。例えばクラス担任の先生だってテストをしているテスト関係ということになりますし、先生がお認めになるかどうかわからないけれども、経済の仕組みの中でお仕事をしています。いろんなリソースを使ったり、お給料を皆さんに払ったり、もらったり、あるいは、この建物があつたりとか、仕組みの中で働いていらっしゃるわけで、その多様性というのは実はテストできない項目の一つなんです。多様性そのものがテストできない項目であるからではなくて、そのコストが払えない、高くつき過ぎるからなんです。

ケントが面接のことを言っていたかもしれませんが、面接という方法も、量的なテストから質的なテストへの動きの一つではありますが、やってみたらお金がかかり過ぎるということがわかった。

締めくくりに一言言いますと、多様性をテストするならば、今使える電子機器を、ありとあらゆるものを生かすことだ。

まだ言いたいことはあるけれども、ここで一応締めくくりにします。

3人の発表者の皆さんありがとうございました。

この機会をありがとうございます。(拍手)

田中教授(司会)

ヌーバウアー先生、ありがとうございました。

3人のそれぞれのご発表を、共通点、あるいはそれぞれのところから出されてくる課題だとか、さまざまな視点からご議論をいただいたかと思います。

若干の残っている時間で、本当はこういう上がってきた課題を何日かかけてじっくりとディスカッションできれば一番いいわけですが、今回はそういうわけでも時間もございませんが、どうでしょう、このあたりでもって、オープンディスカッションに少し時間をとってみたいと思うのですが、お三方、あるいはヌーバウアー先生が3人のご発表を受けて新たに提示をされた、掘り起こしていただいた課題、意識、さまざまあろうかと思いますが、そういったところでコメントでも質問でも、さらなる課題でも構わないと思いますが、いかがでございましょうか。皆さんの中からご意見を、ご発声をいただきたいと思います。どうでしょう。

余り深刻にならなくてもいいんだと思いますよ。1つでも、2つでも。

荒井教授

サンキュー、ディーン。大変興味深い指摘を、いろいろな側面からいただくことができました。

ディーンの指摘の中で、非常にはっきり認識できたことがあります。それは日本の状況についてですけれども、恐らく日本における多様性というのは、空気のようにあるんだろうと。そういう、従来が非常にシンプルなシステムと特徴を持っていた日本のカレッジ・

アドミッションというのが、そうではない世界に移行した。

多様性をこれからつくっていかなくやいけないというところにちょうど自分たちが立っていて、むしろアメリカのジョンなんかのお話とか、それからケントの場合もそうですけれども、既に存在する多様性といいますか、それは社会の構成そのものが日本に比べて非常に多様性に満ちている。その反映としてカレッジ・アドミッションの多様性というのはあった。だけど、我々は、我々はといいますか日本のケースは、これは少し言い過ぎかもしれませんが、これまで非常にシンプルファイドされた状況から対極のほうに移行し始めた。だけれども、それは決して考え抜いた、あるいは非常にポリティカルな行動として何かを選択されたわけではなくて、学力選抜の対象として何か対極を求めて動き始めたというところであって、その構造自体が、実は我々自身が認識できていない。そういうことを、ディーンのサジェスションといいますかコメントから、非常に強く私のほうで受けとめられたこととさせていただきます。

ヌーバウアー教授

これは私の見方ですけれども、ここ日本では大変おもしろい、しかも重要な社会的な課題が浮き彫りになっていると思うんです。これは社会問題としてではなくて、社会分析としておもしろいことがある。

今、あのボードに絵をかきたいなという、ちょっと教室の先生っぽくなってしまいう誘惑に一生懸命抵抗しているんですけれども。

(フロアから) 書けば? (の声)

ヌーバウアー教授

昔は、入学者数と一般入試を受ける人の人数は総じて変わらない数でしたが、年を追う事に、入学者数と一般入試を受ける人の間に開きが出てきている。つまりテストを受ける人たちに差異がでてきたということです。この差の部分の人は、一般入試で大学に入るということを選ばずに、AO入試を受けた人たちです。私たちの関心にあるのは、AO入試であり、ここから見えるのはこれが我々の理想とする、望むべき状況の差異だということです。アメリカのデータから何か重要なことが見えるでしょう。この部分に何か新しい種類の多様性が生まれてきたということだと思います。方法論的な問題は何かというと、この多様性を定量的な変数、定量的にあらわせる変数はあるかどうか。それは何かということです。

ここが大学院生向けのセミナーだとしたら、皆さん昔のことでしょうけれども。もしもそうなら、質問は、この変化を生じさせる要素は何かと、学生だったら聞きますよね。言ってみれば、予測できない多様性とでも言いましょうか。

それからもう一つ、荒井先生のお話で、高校を卒業しない人がふえているということで、これはパイプの穴から漏れている、ドロップアウトということで、パイプの穴というふうに使われています。このことについては、2つのことを言った後に話しましょう。

パイプの水漏れ問題は、先進諸国どこでも、世界中で起きていまして、びっくりするほ

どたくさんの高校生が途中でやめている。だから、別にそれは、日本、韓国、アメリカ、メキシコ、イタリアなどに限ったものではなくて、世界レベルの現象ですが、ここで考えるべき点は、では何でということですよ。

もう一つだけ言ってから、さっきの大学院生向けセミナーの論点に戻りますけれども、どうもこの現象は学生たちに起因するらしいと推論する傾向が私たちにはありませんか。それは何ですか。なぜ教育の性質そのもののほうを問わないのでしょうか。これは私の調査のための仮説であって、だれもこの仮説を検証してくれてはいないんですけれども、これは私の仮説ですけれども、学生の学び方の性質が既に変ったんです。その変わりよう、その変化が示す曲線を私たちはわかっていないし、そういう変化を促す要因が何なのかも知らない。

私たちはこんなところにいるんです。そして、こちらを眺めている。多分、ここが間違った観点なのだろうと。これが学生、学び手がここにいるのであったら、これは私の仮説だけれども、私たちはこちらではなくて、この学生たちがいるところにはいない。

私がこのセミナーの一員だったら、プロジェクトを立ち上げて文科省からお金をもらってきます。そして、このパイプの穴から落ちた人々に聞いて回るんですけれども、アンケートなんかを配るのではなくて、そのフォーカスグループとか質的調査の対象となってもらって、彼らなりの世界観を語ってもらうのです。そして、高等教育が彼らにとってどういう価値を持ち得るのか、持ち得たのか、聞いてみるんです。

うまく言えるかどうかかわからないけれども、もう一つ言いたいことは、あのトヨタ、アメリカにやってきて、その方法論として大きな影響を与えたけれども、アメリカのほとんどの人たちは、その本質をわかっていなくて、単なる自動車産業の経営方法の一つだろう、あれは、と思っているけれども、トヨタが身をもってやってみせたのは、労働者の人たちをいかに生産的なプロセスに夢中にかかわらせるかということだったのです。だから、あのトヨタ的なアプローチを、これまでと違うアプローチを、私はこの教育に関してもとってみたいと思う。

田中教授(司会)

時間になってまいりましたが、ようやく本当はこういうセミナーの流れになったらいいなというところの入り口まで来たところでもって、すっかり時間になってまいりましたが、つたない司会で、十分にご議論の時間がとれなくて、まことに申しわけなく思いますけれども、最後に、どうしてもコメントもしくはご意見、ご質問という方、いらっしゃいますでしょうか。

よろしゅうございますでしょうか。

そうしましたら、では、きょうの4名の出席者の方々に一言ずつ最後にちょうだいをして、この会を閉めさせていただきたいと思います。

ダグラス教授

随分楽しかったですし、学ばせてもらいました。

感想というよりも、何だか質問がいっぱい出てきてしまったんですけども、マーケットギャップが大きくなっている、そういう見方が一つ出てきましたよね。それから生産性のこととか、あるいは、このセンター試験のこととか。でも、まさかETSみたいに数字を見て、数字をいじって、それで、その恩恵が、プロフィットがどうのこうのとやっているわけではないんだろうと思うのです。マーケットギャップというのは必要なこと、必然かなとも思うのですね。

高校のドロップアウトする人が多いと。これまた別問題ではあるけれども、そこで出てきたように、人々の振る舞いの背景、理由を知るには、人々をフォーカスグループに含める、これは大事なことだと思います。

一つ興味があるのは、AO入試で入ってくる人たちが、その後、入学後、どのようなできばえなのか、分析はされているのかなと思いました。国立大学は、このセンター入試の消費者様でいらっしゃるので、まあいいけれども、AO入試をやっている、それでうまくいっているという大学だって、ほかにはあるわけですよ。

私自身としては、マーケットのギャップにはあまり、それほど心配しているわけではないです。それから、皆さんには決してETSのような振る舞いをなさらないようにと思っています。

チェン准教授

1つだけ思ったことがあるんですけども、さっき、台湾の先生でずるをした先生の話をしましたけれども、いい先生というのは、UCみたいに研究中心、研究重視の大学だと、なかなか大変だと思うんですね。というのも、1年生、2年生というのは、いい先生に恵まれるというのがとても大事なことで、コミュニティーカレッジなんかのほうが熱心ない先生がいたりする。そこで1年生、2年生を過ごしてから、3年生、4年生でUCに移るという方法もあるわけですよ。

だから、その子にとってふさわしい教え方をしてくれる、ふさわしい学校が選べるというのが大事だと思うんです。だから、みんながみんな東大へ行かなきゃいけないとかいうわけじゃないですね。

ヌーバウアー教授

ありがとうございます。先ほど、ゼミのようにやろうとして、すみませんでした。

世界の高等教育は、これからすごい世界レベルの対話の、高等教育機関同士の対話の、熱心な会話の時代に入っていくと思うのです。そこで問われるのは、高等教育の役割は何だという問いです。この世界は、もう目にもとまらぬ速さで変化をし続ける社会なんです。そこでは大いなる矛盾がありまして、私たちがかかわっている産業というのは、教育という産業は、人間がつくった産業の中でも最も保守的な部門です。けれども、この保守的な部門がグローバルイゼーションとかテクノロジーといった力の大きいなる挑戦を受けています。こんなのは想像もつかないことでした。私たちがいるのはそんな場所なんです。だか

ら、ぼーっと待っていることはできないんです。私たちはお互い知り合っていますし、やりとりもできますから、これから対話を始めましょう。

前、ある教授が私に言ってくれたんですけれども、ゼミというのは正しい答えを探す場所ではなくて、正しい問いを発する場なんだと。

ありがとうございました。(拍手)

田中教授(司会)

ありがとうございました。

では、最後に荒井先生に、ご自分のまとめも含めて、洞察力ある言葉で締めくくっていただきたい。

荒井教授

十分に大学院のゼミを思い出しまして、その学生の心境になっております。

時間も押しておりますので、決して洞察力のある発言は出てまいりませんが、実は、最後にディーンが言ってくれましたように、正しい問いを発していく、そういう十分な機会になったことを大変喜んでおります。

実はここでご報告といたしますか、皆さんにご了解をいただきたいと思いますが、きょうの3人の研究者の方々に、機構としてはインターナショナル・アドバイザーという形で、これからの機構の活動に、さまざまな観点から支援をいただこうというふうに思っております。その旨、皆さんにご了解とご支援をいただきますようお願い申し上げまして、きょうのセミナーを閉じたいと思います。

本当にご協力ありがとうございました。報告者の先生方にどうぞもう一回拍手をお願いいたします。(拍手)

それでは、大変タフに、この5時間近くにわたる通訳をしてくださいました冠木友紀子さん、それから、大変にシャープな司会をやっていただきました田中さんに、改めてまた感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

資料： 登壇者略歷



About CSHE

People

Events

Publications

Research

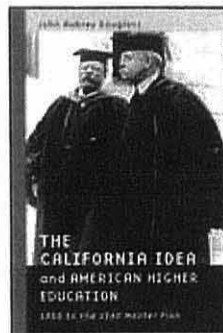
News

John Aubrey Douglass

CSHE > People > John A. Douglass

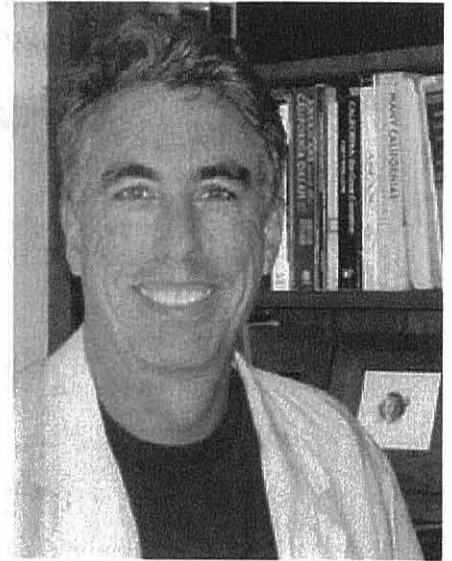
John Douglass is a Senior Research Fellow whose current research interests are focused on the student experience in research universities, the role of universities in economic development, science policy as a component of national and multinational economic policy, the evolving role of mass higher education in society, and the influence of globalization.

He has served as the deputy director of the Center from 1999 to 2002 and is the editor of the Center's Research and Occasional Papers Series. Before coming to CSHE, he served as the chief policy analyst for the University of California's Systemwide Academic Senate and held teaching and research positions at UC Santa Barbara. He has been a Visiting Professor at the Institute d'Etudes Politiques de Paris (Sciences Po), a Visiting Research Fellow at the Oxford Center for Higher Education Policy Studies (OxCHEPS) and a Visiting Policy Analyst at the California Postsecondary Education Commission.



Dr. Douglass is the author of *The California Idea and American Higher Education* (Stanford University Press 2000) recently reissued in paperback and also published in Chinese with a special preface.

He is also the author of *The Conditions for Admission: Access, Equity and the Social Contract of Public Universities* (Stanford University Press 2007). Recent scholarly publications include articles in *Higher Education Policy and Management* (OECD),



John Aubrey Douglass, Ph.D.
Senior Research Fellow

Center for Studies in Higher Education
University of California, Berkeley
771 Evans Hall #4650
Berkeley CA 94720-4650

Phone: (510) 643-9211
Fax: (510) 643-6845
E-mail: douglass@berkeley.edu

Current Research Projects

UC History Digital Archives

Student Experience in the Research University (SERU): including the University of California Undergraduate Experience Survey

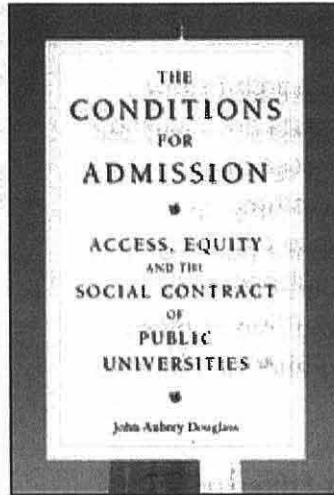
Eligibility and Admissions

The Convergence of Science And Economic Policies in the US and EU

The History of the California Master Plan for Higher Education

Access, Equity, and the Social Contract of Public Universities

Higher Education Policy (Association of International Universities), *Perspectives* (UK), *Change Magazine*, *Minerva*, *The Journal of Policy History*, *California Politics and Policy*, *History of Education Quarterly*, *The American Behavioral Scientists*, and the *European Journal of Education*.



He is also the founding director of the [UC History Digital Archives](#) (UCHDA) and is a co-Principal Investigator in the CSHE-based [Student Experience in the Research University project](#) (SERU) which

developed the University of California Undergraduate Experience Survey (UCUES)—a census survey of all undergraduates with the objective of creating analytical tools for improving the undergraduate experience.

Recent Publications & Presentations

The Global Competition for Talent The Rapidly Changing Market for International Students and the Need for a Strategic Approach in the US by John Aubrey Douglass and Richard Edelstein. CSHE.8.2009 (October 2009)

Globalization's Muse: Universities and Higher Education Systems in a Changing World by John Aubrey Douglass, C. Judson King, Irwin Feller (ed.) Berkeley Public Policy Press, 2009

Whither the Global Talent Pool? by John Aubrey Douglass. *Change Magazine* (July/August 2009)

(Kent) Sheng Yao Cheng

Associate Professor

Graduate Institute of Curriculum Studies/Center for Teacher

Education

National Chung Cheng University, Taiwan, R.O.C.

168 University Rd., Min-Hsiung

Chia-Yi, Taiwan, R.O.C. 621



E-mail: kentcheng@ccu.edu.tw

Phone : (886)-5-2720411#36400

Educational Background

- 2001-2004 Ph. D., Social Science and Comparative Education, Graduate School of Education and Information Studies at UCLA.
Dissertation Topic: The Politics of Identity and Schooling: A Comparative Case Study of American Indians and Taiwan Aborigines.
Advisers: John Hawkins and Carlos Torres
- 1999-2001 Doctoral student in the Department of Education at NTNU, Taiwan.
- 1997-1999 M.A. in Education
National Taiwan Normal University, Taiwan
Thesis Topic: A Study on Educational Selection Mechanisms in Hong Kong
Adviser: Shan Wen-Jin
- 1990-1994 B.A. in Education
National Chengchi University, Taiwan
(GPA 4.0)

Research Experiences

- 2008-present Associate Professor, Graduate Institute of Curriculum Studies, College of Education at National Chung Cheng University
- 2008-2010 Program Director, SIG: Higher Education, Comparative and International Education Conference (CIES)
- 2005-present Co-Director, Global Education Training and Leadership Institute (GETLI)
- 2004-2008 Assistant Professor, Graduate Institute of Curriculum Studies, College of Education at National Chung Cheng University
- 2002- 2007 Research Coordinator, Center of International and Development Education (CIDE) at University of California, Los Angeles
- 2003- 2004 Research Assistant, Paulo Freire Institute (PFI) at University of California, Los Angeles.
- 2000-2001 Research assistant, Taiwan Aboriginal educational policy analysis with Dr. Jason Chang at National Taiwan Normal University, Taipei
- 1997-1999 Research assistant: Hong Kong Examinational Reform Analysis with Dr. Peter Shan at National Taiwan Normal University, Taipei

Teaching Experiences

- 2008-present Associate Professor, Graduate Institute of Curriculum Studies, College of Education at National Chung Cheng University
- 2007 (UCLA) ED X331:Current Issues in Comparative, International & Development Education
Co-instructed with John Hawkins, Val Rust, and James Jacob
- 2005 (UCLA) ED X331:Current Issues in Comparative, International & Development Education
Co-instructed with John Hawkins, Val Rust, and James Jacob
- 2004-2008 Associate Professor, Graduate Institute of Curriculum Studies, College of Education at National Chung Cheng University
- 2000-2001 Adjunct lecturer at National Open University, Taipei
- Methodology of Educational Research
 - Adult Psychology and Counseling
- 1999-2001 Teaching Assistant at National Taiwan Normal University
- Assisted students with daily experiences and answered their questions
 - Charged of International Conference and Academic Exchange
 - Supported financial and computing skills.
- 1996-1998 Teacher at Shih-Chien Public Primary School, Taipei
- Full teaching responsibility for thirty students of the third grade
 - Full administrating responsibility for the one thousand and five hundred students' moral behaviors and discipline counseling.

Publications

- Cheng, S. Y. (2009-In press). Quality Assurance in Higher Education: The Taiwan Experiences since 1990s, *Higher Educational Education Forum*. (Forthcoming)
- Jacob, W. J., Car, M. J. ,& Cheng, S. Y. (2009-In press.). Impact of Cultural Awareness on International Student Teaching Program in Pacific, *Pacific Rim Studies*, 2(1). (Forthcoming)
- Cheng, S. Y. and Jacob, W. J. (2008). American Indian and Taiwan Aboriginal Education: Indigenous Identity and Career Aspirations. *Asian Pacific Education Review*, 9(3), 233-247. (SSCI)
- Cheng, S. Y. and Hawkins, J. (2008). The Study on UCLA Self-Evaluation. *Evaluation Bimonthly*, 15, 56-59 .
- Chen, C.D. and Cheng, S. Y.(2008). Cultural Capital and Academic Achievement. *Journal of National Hsinchu University of Education*, 25(1), 79-98.
- Cheng, S. Y., Hung, C. C., and Ho, Y. W. (2008). Graduation and Employment. *Taiwan Higher education Research Journal*, 22,1-15.
- Cheng, S. Y. and Tsai, C. T. (2008). The Research on Teacher Education Alliance. *Contemporary Educational Research*, 16(1), 41-76. (TSSCI)
- Cheng, S.Y. (2008). ° The Critique of Michael Vavrus and His Transformative Multicultural Educational Teacher Education. *Chung Cheng Educational Studies*, 6(2), 95-104.
- Cheng, S. Y. and Jacob, W. J. (2007). A Comparative Case Study on Indigenous Educational Policies Between Taiwan and the United States. *Comparative Education*, 63(2), 40-78 .

Katsuhiro Arai



Vice Director-General for College Testing, Professor (2009 to present)

The National Center for University Entrance Examinations

Emeritus Professor, Tohoku University

His research topics are mainly about higher education policy

and Educational Testing and he also teaches Educational

Policy and Planning at Tohoku University Graduate School of Education as an adjunct professor.

Education

Ph.D. Tokyo Institute of Technology, Department of Social Engineering, 1978

M.A. and B.A. Tokyo Institute of Technology, cognate field Chemical Engineering

Professional Position

2009 - present Vice Director-General for College Testing, Professor

2006 - 08 Vice-President for Academic Affairs, Tohoku University.

2005 - 07 Dean of the Department of Education, Tohoku University.

2000 - 09 Professor with tenure, Tohoku University Graduate School of Education,

1996 - 00 Professor with tenure, Research Division,
National Center for University Entrance Examinations

1991 - 95 Professor with tenure, Research Institute of Higher Education,
Hiroshima University

1985 - 91 Section Chief with tenure, Research Division,
National Institute of Educational Research.

Professional Society

Japanese Association of Higher Education Research

Executive Board (elected), 1997 - present

The Japan Society of Educational Sociology

Executive Board (elected), 2002 - 2009

The Japan Educational Administration Society

Executive Board (elected), 2001 - 2004

Advisory Group and National Council

Expert Member of Central Education Council (1998 - 1999)

Member of National Curriculum Council (1999 - 2000)

Expert Member, Committee of University Admissions Testing, in Japan Association National Universities (1993 - 04, 2008 - 09)

Editorial

Chief, Editorial Board, Japanese Association of Higher Educational Research (2005 - 07)

Member, Editorial Board, Japanese Association of Higher Educational Research (1997 - 01)

Member, Editorial Board, the Japan Society of Educational Sociology (1993 - 1997, 2009 - to present)

Teaching Activities

Education Policy and planning

Higher Education policy

Articulation between high School and University

Publications

ARAI, Katsuhiko and KURAMOTO, Naoki (ed.), 2008, *Agenda of National Assessment of Basic Scholastic Ability*, Kaneko Shobo,

ARAI, Katsuhiko and HASHIMOTO, Akihiko (ed.), 2005, *High School to College Articulation; toward the universal stage of higher education*, Tamagawa University Press

FUZII, Mitsuaki, YANAI, Haruo and ARAI, Katsuhiko (ed.), 2002, *Comparative Study on University Entrance Examinations*, Taga Shuppan

YANO, Masakazu and ARAI, Katsuhiko (ed.), 1990, *Educational Planning at life-long learning Society*, Kyoiku Kaihatu Kenkyujo

And others.

Reports

ARAI, Katsuhiko (ed.), 2006, *Supply Mechanism of Japanese Private Universities*, Japan Society of Promotion Science.

ARAI, Katsuhiko (ed.), 2005, *Study of National Assessment of Educational Progress in U.S.*, Japan Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology.

ARAI, Katsuhiko (ed.), 2000, *What have College Students Studied at High school?* , The National Center for University Entrance Examination.

ARAI, Katsuhiko (ed.), 1996, *Re-medial Education in Colleges*, RIHE(No.42), Hiroshima National University and others.



Faculty Members

[Belinda Aquino](#)
[Richard Chadwick](#)
[Jim Dator](#)
[Kathy Ferguson](#)
[Petrice Flowers](#)
[Jonathan Goldberg-Hiller](#)
[Manfred Henningsen](#)
[Katharina Heyer](#)
[George Kent](#)
[Sankaran Krishna](#)
[Neal Milner](#)
[Lawrence Nitz](#)
[Ira Rohter](#)
[Jungmin Seo](#)
[Michael Shapiro](#)
[Noenoe Silva](#)
[Nevzat Soguk](#)
[James Spencer](#)
[Carolyn Stephenson](#)
[John Wilson](#)
[Kate Zhou](#)

Deane Neubauer

Background: I received a Ph.D. from Yale in 1965 and have taught at the University of California (Berkeley and Irvine), held a postdoctoral fellowship in Anthropology at the University College, London, and currently hold adjunct professorships in Public Health at the University of Hawaii and at the Faculty of Health Sciences of the University of Sydney. In recent years, I have been active in health policy reform activity in Hawai'i, the United States, New Zealand, and Australia.



In 1980 I became the founding dean of the College of Social Sciences at the University of Hawaii, a position I held through August 1988. Since 1983 I have served with the Western Association of Schools and Colleges (Senior Commission) as an evaluator and team chair, and from 1995-2001 as a member of the Senior Commission.

In September 1997 I was the recipient of the Robert W. Clopton Award for Outstanding Service to the Community. I continue to serve on numerous community boards and conduct various research and service projects for community organizations. I have served as Director of the [Globalization Research Center](#) and as Interim Chancellor of the University of Hawaii, Manoa, and as Interim Vice President for Academic Affairs.

Research interests: My primary interests lie in policy, especially health policy, and political economy with a particular emphasis on globalization phenomena.

Courses taught: In addition to courses in Political Science, I have taught in the Department of Sociology, offering courses in the sociology of post modernism, the sociology of health care services, and Pacific Islands development,

独立行政法人大学入試センター 入学者選抜研究機構発足記念セミナー報告書
「大学入学者選抜～進学、機会の平等、そして質保証～」

発行 平成 23 年 2 月 28 日

編集・発行 独立行政法人大学入試センター入学者選抜研究機構
〒153-8501 東京都目黒区駒場 2-19-23
電話：03-3468-3311（代）

印刷 株式会社 コームラ
